

---

# とあるもしもの座標移動《ムーブポイント》

シラッチ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とあるもしもの座標移動<sup>↑ポイント</sup>

### 【Nコード】

N4531Y

### 【作者名】

シラッチ

### 【あらすじ】

結標さんに憑依した人のお話です。

結標さんが

かなりチート化したり原作のストーリーが変わったりしています。ご注意ください。（現在、結標さんは高校二年の生活を満喫中）

## 憑依したのは座標移動

みなさんは、もし禁書の世界のキャラに憑依出来るとしたらどのキャラを選ぶ？

私だったら右方のフィアンマとか一方通行辺りに憑依したいと思う。だって無双したいもん。

ああ、垣根や軍覇辺りもいいかも。アイツ等無限の可能性があるイメージあるし。

「……むすじめ あわき結標淡希。という事は能力はムフポイント座標移動か……微妙」

鏡に映る長い赤毛をお下げ髪のように耳より低い位置で左右に結つて、背中の方へ流している女の子を見てそう確信した。

しかし、服装は原作の痴女みたいなサラシミニス力では無く、普通の白い半袖のカッターシャツにプリーツスカートという極普通の服装だった。

……だが、これどこの制服？ 原作の結標が所属する霧ヶ丘の制服ではないが……もしかしたら中学生時代の結標なのだろうか。

まあそれはともかく。

座標移動、か。弱い能力では無いと思うのだが、なんだかなあ。

上手く使えばかなり強力な能力だが、如何せん一方通行や未元物質みたいな派手さはないし、正面突破じゃおらあああ！！があまり出来そうにない能力なんだよね。

しかし……無能力者とかに憑依しちゃうより遙かにましか。いや、上条さんは例外だけだね。

「とりあえず能力使ってみますか」

私は鏡から一メートル程離れた位置に落ちている学生鞆に目を向ける。

手のひらを広げ、鞆を掴む用意をする。

「来い、鞆！」

無音で鞆が私の顔の前十センチ前くらいに空間移動してきた。

「うおっと！」

落ちてくる鞆を慌てて両手でキャッチする。

どうやらまだ座標の指定が甘いようだ。

まだ中学生の頃の結標だし、演算能力が足りないのかな。それにしても、部屋の中だけでは情報量が少なすぎる。

「外に出てみるか」

学生寮を出ると、通りにちらほら私と同じ制服を来ている人達が歩いているのが確認出来た。

飾りつきの無い黒い折り畳み式の携帯で時刻を確認してみると、7:58と表示されている。成る程、今は登校時間のようだ。学校までどれくらいの距離があるか知らないけど。

とりあえず登校してる子達に着いていこう。

「あいたっ！」

「いよう、優等生！」

突然誰かに背中を思い切り叩かれたようだ。

かなりイラッとした私はソイツを思い切り睨み付ける。

「いつもは三十分前には学校に来てるのに今日は遅いじゃ……あれ、何で怒ってるの?」

茶髪でややツンツンヘアの男子はこちらを見てキョトンとした顔をしていた。

うん、誰だコイツ?

## 憑依したのは座標移動（後書き）

ちよいと女が主人公の小説も書きたくなったので書いてみました。  
あと、チート結標さんも書きたいというのもあります

今の周囲の状況を簡単に把握しました

とりあえず今確認出来ている事を述べよう。

まず、私が通う中学は朝陽南中学あさひみなみという第七学区という特殊な能力を開発する事に念を置いている学校らしい。

将来進学するであろう霧ヶ丘に似たようなところがあるな。あそこも特殊な能力を開発させる学校だったはず。

次に私の能力の強度は大能力者《レベル4》だ。これはクラスメイトから教えてもらった。

という事は今の時点で自身をテレポさせる事も可能っぽいね。帰宅する時やってみようかな。

今日学校行って分かった主な事はこれくらいか。

ね……あ、今朝に私に無礼な挨拶をかましやがった男の名は霧ヶ峰きりがみ優ねゆうというらしい。

原作にもアニメにもこんな奴はいなかった。まあ原作にもアニメにも出てないだけで結標淡希と交流がある奴は結構いるだろう。

今はもう全ての授業終わってホームルームに担任の教師が来るのを待っているが、霧ヶ峰は周りのクラスメイトとはしゃいでいる。

コイツはどうやらクラスのムードメーカーみたいな存在らしい。

それにしても常盤台中学とかに通いたかったなあ。

あ、でも美琴や黒子が入学する前に卒業しちゃうね。けど、心理メンタ掌握リアウトの食蜂さんにはギリギリ会えるな。

ん、先生が来たようだ。

「やあ。結標君」

ホームルームが終わり、放課後イベントも特に起こらず、校門を出た所で白衣を着た男に声をかけられた。

学園都市で白衣とか研究者以外に考えられないな。

「明日は身体検査システムスキャンの日だ。悪いけど能力の精度を確かめるために研究所に来てもらうよ」

身体検査が明日あるのは知っていたが、私こと結標淡希がどこかの研究所に所属していたってのは知らなかったな。

まあ座標移動ってただでさえ珍しい空間移動系列の中でも貴重な存在らしいから、専門の研究所があってもおかしくはない。

「ああ。そうだったわね。研究所へは徒歩で移動出来るの？」  
「どうでも良い事だが私は会話する時は原作の結標と同じ口調で話す事を心掛けている。  
特に意味は無い。ただ、演じるのがなんとなく楽しいだけ。」

「結標君、今日は体調がよろしく無いのかい？ 君の能力で研究所まで行くに決まってるだろ」

研究者っぽい男は怪訝な顔をしながら遠くに浮かんでいる赤いバールーンを指差す。

「えっ」

「さあ研究所の目印のバールーンまで僕と君自身を座標移動で移動しよう……どうした？ まさか本当に具合悪い？」

「いや、大丈夫よ。あはは」

多分これって能力を使いこなす練習か何かだよな。

私を送迎のパシリに使うためじゃないよね？

……ま、いいか。どうせ帰宅する時に能力使っつて決めてたしね。

「行くわよ」

研究者の男に肩に手を置く。

通行中の人間とかに間違えて転移したりするとおぞましいオブリエが出来ちゃうから、まずは障害物が少ない上空にテレポするかね。真上に障害物は無し、よし、まずは上空八十メートルくらいに座標移動！

「お、おおおっ」

すげー！ あっさりとテレポできちゃったよ。

見る！ 人間がゴミのようだ！ ……うわっ、研究者の男がこっち不審な目で見てるよ。

これ以上変な目を向けられないためにもさっさと研究所まで行くか。

お次は前方へまた八十メートル！

(よしよし)

先程よりバルーンが大きく見えるって事は今度も成功したって事だ。

座標移動を繰り返している内にバルーンの目の前くらいまで移動出来たので、次に地面の三十センチくらい上に転移する。誤って地面に足埋めるわけにはいかないからね。

「お疲れ様。いつもより精度とか能力を使う間隔が短くなっているんじゃないか？」

「あら、そうかしら」

「君は自分の能力を恐れている縁があったからな……少しはそれが薄れてきたのかな？」

「……………」

うーむ。原作の結標はそうだったかもしれないが、私は結標であつて結標でない人物みたいな人間だからなあ。

ぶつちやけ能力なんて私はただの便利な道具としか思つてない。

「いけない事聞いちゃったかな？」

「別に。気にしないでいいわ」

「そうかい。じゃあ行こうか、主任のところへ」

主任か。座標移動開発の主任の事なんだろうが、変な人物だったら嫌ですねー。

つつか、今気付いたがこの研究所は建物は平凡だが敷地はかなり広いな。

なんか期待されてるみたいでプレッシャーががが。

「行こうか」

研究者の男は先導して研究所内に入つていった。私はいつの間にか口の中に溜まつていた唾を飲み込み、彼の後に続いた。

今の周囲の状況を簡単に把握しました（後書き）

主人公は結構お気楽な人だから結構メンタル強いです

## 主任に会いました

中に入ってみるとロビーらしき空間が私を迎えていた。観葉植物や長椅子とかが置いてあるスタンダードな感じだ。

「ちょっと待っていてくれ。今から主任の神山 かみやま さんに連絡つけるから」

研究者の男は白衣のポケットから携帯を取り出し、電話先の相手と何やらやりとりを始めた。

「神山主任、結標淡希が到着しました。……え？ まだ狩りが終わってない？ いや何ゲームなんかやつちやてるんですかアンタ」

おいおいなんか不安になってきたんですけど。頼む！ 変な奴はお断りだ！

「今日は帰って貰って、いくらなんでも理不尽すぎるでしょうが！ 呼び出したのはアンタだろ！ てか、結標君のメンタル面に問題があるのって絶対アンタの性格せいでしょう！ ……あ」

こっちみんな。

まあ、さつさと先に進めてほしいから愛想笑いして手振っとくか。失言は誰でもしちゃう事だ。

「え？ お前がうるさいからクエストに失敗した？ 知るかつ！！ あれ、切れた」

あーあ、今思えば学園都市の優秀な研究者は木イイイ原クウウウンみたいに変人が多いのかな。

今さっきの会話だけで変人フラグがビンビンだよ。もう、ここは腹を決めるぞ。

「ん？ エレベーターが動いてる？　なんだ結局来るのかツンデレさんめ〜」

研究者の微妙にキモい発言の通り、チーンというエレベーターが各階で止まる時のお馴染みの音がロビーに響いた。てか、今気づいたよエレベーターがあつたなんて。

あと、何でもかんでもツンデレにしちゃうのは良くないと思うよ研究者さん。

「光山ああああ！！」

「びぶるちっ！？」

今起きた事を説明しよう。エレベーターから飛び出してきた金髪ポニテの白衣着た女の人が研究者光山君を蹴り飛ばして、その勢いで飛んだ光山君が観葉植物の鉢植えに頭だけ埋まった。

それにしても原作SS2のモツ鍋さんみたいな断末魔だったな……ご冥福をお祈りするよ光山君。

「よー、久しぶり淡希」

「ひ、久しぶりね」

お、おお。何か思ったとおりフレンドリーで悪くなさそうな人だ。それに美人巨乳だな。胸元が大きく開いた白衣から見える谷間がエロいぜ。

けど、あんまりこっちをジロジロ見るのはやめてほしいな。

「淡希……お前……！」

「どうかしたの！？」

「前来た時よりおっぱい大きくなってない!？」  
「ズコーーーーーッ!!」

この人が男だったら確実に壁に埋めてたぞ。ああ、女でも黒子みたいなガチレズだったら埋めるけどね。

「いきなり何よ……」

「ふふ、冗談だ。さて、早速だが実験を行おうか」

「どこで」

「外で」

妙に外の敷地広いと思っただらやっぱりか。

神山に案内されて着いたのは学校にある運動場のような広い場所だった。

完全に殺風景な場所ではなく、アルファベットが書かれたコンテナがいくつか積み上げて並べてあったりする。あと何か建設に使うような重機も何台か置いてある。

「さて、まずは飛距離の検査から行おうか」

「何を飛ばせばいいの?」

「光山」

「!?!」

「というのは冗談であそこにあるアレをまず飛ばしてもらおうか」

良かった。もう少して『もうやめてry』とか言いそうになっただわ。

アレって……ああ、あの楕円形の形した鉄の塊みたいなヤツか。

確かアニメで黒子がああいうの飛ばしてたよな。  
とりあえずこっちに引き寄せてと。

「あ、ちよつと待った」

「まだどうでもいい事言うつもりじゃないでしょうね」

「お前確か自分の能力の精度を少しでも上げたいとか言ってたわよね？」

「そりゃあ精度が高いに越した事はないわね」

「お前の座標移動は普通の空間移動と違って始点と終点が固定されない自由度が高い能力だ。そこでだ」

背中に手を回して神山は何かを取り出した。

お、この黒い棒みたいなのはもしかや……！

「これは……」

「警棒兼用の軍用懐中電灯だ」

「この光で能力使用時の基準をつけろという事ね」

「おつ、察しがいいなさすがお前だ」

早速、懐中電灯の光を鉄の塊に当ててみる。

成る程、これはいい。光が当たっている物体だけを転移すると考えれば余計な演算は必要無くなる。

朝方の違和感があったのはこの懐中電灯という相棒が無かったからか。早速、足元に鉄の塊をアポトと。

「どんな感じよ」

「いい感じね。余計な演算の必要が無くなったわ」

「ふっ、それは良かった。じゃあ早速飛距離の検査を始めるが準備はいいか？」

「バッチリよ」

「今までの記録はその自重九十キロのソイツを五百メートルちょいだ。それじゃあ検討を祈る」

ちよい（・・・）っておい。アバウトだなー。いや、このアバウトさはひよっとしてメンタル的に弱い結標を気遣いとかだったりするのだろうか。

まあいいや。とりあえずこの広場の奥にまで飛ばすつもりでやっ  
てやろう。

ッ！

『飛距離、千二百メートル』

「なっ!?!」

「うえっ!?!」

地面に幾つも設置されていた機材の音声を聞いて、思わず変な声  
出してしまった。

せ、千メートル越え!?! え、原作の結標淡希さんの最高飛距離  
を中二の時点で上回っちゃったよ!?!

何これ憑依補正なの? 転生オリ主がよく最強だったりするあれ  
に近いものなのか!?! ……いや、少し大袈裟か。

「お、おま……淡希。一週間の内に何があつた!?!」

こっちが聞きたいです。

主任に会いました（後書き）

さあ 結標淡希ん第一段階の強化が始まりました。

身体検査の結果は……

「た、多分貴方がこの懐中電灯をくれたお陰じゃないかしら」

「そんな……魔法のステッキを渡したんじゃないんだぞ。いきなりこんな……」

まぐれかもしれないからもう一度やってみるか？

近くにある分銅もどきを一度こちらに寄せて、もう一回　！

『千三百メートル』

まぐれどころか記録伸びちゃったー！

「偶然の成果でも無いみたいだしなあ。お前、明日の身体検査で超能力者《レベル5》認定されるかもな」

「へー」

「意外とそっけない反応なのなお前。空間移動系初の超能力者だぞ？」

結標つて最高飛距離が八百メートルくらいで転移できるのは自重4・5トンくらいまでの物体だったよな。それで自身をテレポ出来ないから大能力者《レベル4》止まりで超能力者認定されてるんだっけか。

だから今の時点で超能力者判定されるのは当然、そう当然。と、思ったけどまだ飛ばせる重量の限界を測ってないや。

「次は転移出来る重さも測るか。……前の記録は五百キロちょい超えだったかな」

「また数値がアバウトすぎる」

「気にするな。ミリグラムとかまで測ったら鬱陶しいだろ、お前への気遣いだ」

自分で言っちゃうとただの面倒臭がりに見えちゃうよ神山さん。

「向こうにコンテナがあるだろう?」

「ええ」

「あれを飛ばしてもらおうと思ってるんだが……」

「重さはどれくらいあるの?」

「一つで約二千キロだ」

「いきなり凄くハードル上げたわね」

「いや何か今のお前だったら出来そうない気がしたんだが……無理か?」

「確かに飛ばせる距離は明らかに上がってる。という事は演算能力上がってるって事だよね私。」

正直……やれそうだ。

むしろ今なら出来ない気がしない。

というか原作の結標の記録は四千五百キロくらい……今の私ならこれ上回れるんじゃないか? えーと何か手頃な物はないかな。コンテナを同時にいくつも飛ばすのはかなり大変な気がするのよね。

「あれってどれくらいの重さがあるの?」

私が指差したのはキャタピラ式の巨大なトラクターだ。恐らく建設用か何か用だろう。なんかアタッチメントつけられそうな部位あるし。

「七トンか八トンぐらいだった筈だが。ってまさかお前!??」

「ええ、そのまさかよ」

「……まあいい。やってみる」

よーしまず懐中電灯で標準つけてと。後は始点と終点を決めて演算する。

始点はそのトラクター、終点は私の十メートル前でいいだろう。

よし、やれる　！

「凄い……」

無事に、トラクターは指定した位置に移動した。

神山の驚く声が心地良いな……ッ！？

「淡希、おいどうした淡希！？」

身体中を突然襲ってきた違和感に耐えきれずに気付けば私は両手と両膝を地面に着けてしまっていた。

何だこれ三半規管が狂ったみたいに頭がくらくらする。しかもこめかみ辺りの血管が収縮する感じもするし、身体中から脂汗が吹き出てくる。

体に負担がかかっているのか……？　ああ、そういえば過度な演算をすればそうなるんだっけか。

「大丈夫か？」

神山が私の背中を擦りながら心配そうに此方を覗き込んでくれている。

とりあえず作り笑いを神山に向けて、立ち上がる。膝はまだ震えるがすんなり立ち上がった。

一時的に体調がかなり悪くなるだけで、ヤバい後遺症とかが残るわけではなさそうだ。疲労はかなり溜まったが。

そつだよ思い出した。原作では結標は千キロ以上の物テレポしたら体調不良起こすんだつた。

調子に乗りすぎちゃつたな。

「おい、歩けるのか？」

「大丈夫。一瞬だけ体調悪くなつただけだから」

「すまん。私が止めれば良かったのにな」

「いや、私が調子に乗りすぎたのが悪かつたわ」

うわ、なんか暗い空気になつてきた。この人意外と真面目なのな。

「……明日は身体検査だから今日はもう帰れ。家で体を休ませておけ」

「分かつたわ。今日は世話になつたわね」

「ああ、待て」

「何か？」

「そのまま帰れとか酷だろ。私が車出すからそれに乗つて帰れ」

やだ……この人優しい……

昨日帰つてすぐにダウンしたが、今日は特に体調不良が無いな。

今は身体検査受けるために学校運動場で順番待ちしているとこだ。

この学校の身体検査は番号順に行うらしい。

「結標さん！」

私の元に二人の女の子が走りよつてきた。

黒髪をポニテにした白木結（白木結さん）さんと茶髪ショートカットの神木絵里

さんだ。二人とも昨日、友好的に私に接してくれた人物である。

「そろそろ結標さんの身体検査が始まるんでしょ？ 私、自分の身体検査終わった後ダツシユで来ちゃったよ」

「白木さん、結標さんの番号は1108番だからまだ十分くらい時間あるよ？」

「特等席確保のためよ。結標さんが身体検査する時っていつも人混み出来るじゃん」

え、それ初耳なんですけど。

まあいいやギャラリーごときに屈する必要はない。

「二人とも身体検査の結果はどうだったの？」

「あたしは安定の大能力者判定でしたよ」

「私もいつも通り強能力者《レベル3》判定でした」

白木さんが発火豪雨で神木さんが心理調整メンタルアジャストだったか。

実は知ってるのは名前だけでどんな能力なのかは私は知らない。私に憑依される前の結標なら知ってたかもしれないけど。

「あーあ。今度こそ超能力者判定受けると思ってたんだけどな」

「それは絶対じゃないですよ」

「何い！？」

「この学校で超能力者判定受けそうな人って霧ヶ峰君か結標さんくらいだと思いますよ」

「ぐう……でも、結標さんは超能力者になれるかもとして霧ヶ峰はなんかムカつく」

霧ヶ峰……あのムードメーカーってそんなに能力凄いのか。気になるな、霧ヶ峰の能力のみ、気になるな。

「次、1108番。結標淡希」

ざわ……ざわ……。

今、私の後ろには千人くらいのギャラリーが立っています。やば  
ば、少し緊張してきた。

あ、そつだ。

「すみません」

「何だ？」

「小道具って使用可ですか？」

「小道具とは？」

木陰にこっそりと置いていた懐中電灯をアポートさせ、検査官に  
見せる。

「ああ、これくらいなら許可しよう」

「ありがとうございます」

「始めるぞ、配置につけ」

白線のラインまで歩き、とりあえず深呼吸する。

いかんいかん緊張しては駄目だ。別に超能力者判定受けないと死  
ぬってわけじゃないんだから落ち着こうぜ私。

「まず、自身の転移を行ってくれ」

自分の転移だと……昨日まともな練習してないぞ。

座標移動って自分飛ばす時、普通の空間移動と違って自分を基準

に演算するんじゃないやなくて、始点と終点の演算しなきゃいけないから演算負荷が高いんだよなあ。

まあ、仮に埋まってももう一度テレポすれば皮ずり剥け回避できるからとりあえず覚悟決めて運動場の端目指して飛ぶか。

懐中電灯マジック ！

『飛距離記録 千二百二十五メートル』

ふっ、ざつとこんなもんよ。

私ともう一度テレポして定位置に戻るとギャラリーから歓声が巻き起こった。

ふふふ、ドヤ顔しちやいそうになるなこれは。

「お、おい、お前懐中電灯に細工とかしてるんじゃないだろうな？」

あ、後で調べさせてもらっぞ

「お好きにどうぞ」

「……っ、次は自分以外の物体の飛距離を測るぞ」

よっしゃなんか自信ついてきた。どんどん来いやあ！

『自身飛距離	千二百二十五メートル
物体飛距離	千三百五十五メートル
最大重量	五千六百キロ
総合評価	LEVEL5

身体検査の結果。

ご覧の通り私、超能力者になっちゃいました。

身体検査の結果は……（後書き）

身体検査での最大重量が減ったのは主人公が体調悪くするのを恐れて少し自重したからです。

さて、次回から戦闘ストーリーや原作キャラ達を出す予定です。

## 【主人公の現在スペック】

【名前と年齢】…………… 結標淡希（14）

【性格】…………… 原作の結標よりも演算力高い、あと少しお気楽な性格だが人前ではクールぶる。

殺しはあんまりしたくないが必要ならばやる予定。

え？ ショタコンかどうか？ 知らんがな。先で分かるんじゃないんですか？

【能力】…………… 座標移動のレベル5。

最大重量は実は10トンまでいける。だが、7トンあたりから体に負担がかかってしまう。

最大飛距離は1300メートルちょいくらい。

懐中電灯無しだと精度が悪くなり、飛距離も重量も低下する。

飛ばせる物体はあくまで固体か液体のみ。

自身の転移は楽々となります。

【主人公の現在スペック】（後書き）

まだまだ結標はパワーアップします

したらこついつ風に書きます

レベル5になってからというもの……ん？ あの白い人物は……！？

超能力者判定されてから一ヶ月が経ち、結構私の生活は変わってしまった。

まず、かなりの金持ちになった。

奨学金も大能力者時代の奨学金明細書と現在の明細書を比べて三倍以上になってたし、超能力者判定祝いとして上層部の誰かさんから口座に五千万円も振り込まれていた。何これ怖い。

あと私の所属していた研究所が多くの人員や設備が送られてきて一気に騒がしくなった事が。

……これまでは嬉しい変化なんだけどね。

「テメエが第八位だな」

「ちょっと俺らと話していかない？」

こんな変化も起こってしまったわけだ。

最終下校時刻過ぎやちよつと人通りの少ない場所を歩いてるだけで頻繁にこういう馬鹿達に絡まれるようになった。

恐らく私が序列八位という超能力者の中で一番低いところに属しているから集団なら勝てるかと勘違いしてるんだろうな。強さ〓序列と考えてるなど愚か愚か。

ああ、一方通行と垣根は別よ。

……しかし、コイツ等にはそぎいたぐんは削板軍覇という禁書原作者公認の序列七位のチート野郎の存在を教えてやりたくなる気分だ。

あーあ、夜中にコンビ二行くくらい普通にさせてくれよ……小腹が空いたんだよ……

「用件は？ 喧嘩を売るなんて用件だったらお勧めはしないわ。怪

我なんてしたくないでしょ？」

「可愛い顔で凄まれても全然怖くないぜ？」

「ハッ、この人数を見てまだ余裕とはますますボコボコにしたくなつてきちゃったぜ」

「おいおい、あんまり傷付けるなよ？ 後で犯すんだからよ」

「その案にサンセー。俺に一番にやらせるよ」

ぶち殺すぞお前ら。

……ちよつと前だったらこの状況に陥ってたら迷い無く逃げた。しかし何度も何度も逃げている内に気付いた。キリが無い。

だから最近絡まれたらそれなりの制裁を加えるようにしている。いつも逃げて「八位は逃げてばかりいる腰抜け。雑魚決定」とかいうれッテル貼られてますます絡まれるようになったら困るしね。

手にある懐中電灯をくるくる回しながら私は考える。

えーと。歩道を塞ぐぐらいの人数だが、ざつと見積もって三十はいるな。どうやって料理しようかな。

スカートのポケットに入れてる高級コルク抜きをぶちこむ価値すらないよなコイツ等。コルク抜きが勿体ない。

だからこれでいきますか！

「ひっ！？」

「か、体がツ……！」

とりあえず懐中電灯の光が明確に当たる十人くらいを胸の深さまで地面に埋めてやった。

「お、おい誰か引きずり出してくれえ！」

「やめた方がいいわよ」

「な、何で」

「地中と体が完全に密着してるのに引きずり出したりなんかしたら皮がずる剥けになっちゃうよ？ 私がもう一度貴方を転移させるなら話は別だけど」

「じ、じゃあ頼む……」

「嫌に決まってるでしょ」

「クソがあー！！ 調子に乗るんじゃないぞ！！」

後ろに控えていた無事な男達の内の一人在手のひらの上に炎を出現させていた。

パイロキネシス  
発火能力か。恐るに足らない能力だな。

さて、今度はどう料理してやるのかな。近くにあるビルとかに転移させて建物の一部にでもしてやるか？

「邪魔だ。雑魚共オ」

！！！？

条件反射で耳を塞いでしまうような轟音が突然発生した。ついでに思わず両手で顔を庇ってしまう。

私が目を開いた時に見えたのは目の前に積み重なるように倒れている男達と滅茶苦茶に破壊された歩道だった。

「ンだア？ まだ生き残りがいやがったか」

この聞き覚えある声と口調。

電灯に照らされてますます白く見える髪と肌に爛々と光る瞳。

そして何よりこの破壊力抜群な能力……！ コイツは…… コイツは……ッ！

「おい、シカトこいてんじゃないぞ」

いきなり一方通行きたああああ！？ ヤバい超カッコいいんですけどおお！？

多分、十三歳の一方通行さんカッコええええ！ 一般人とはオーラが違うわやっぱ。

「わ、私はコイツ等に絡まれていただけよ」

「あん？ 何だ、いつもの俺に楯突いてくる馬鹿共じゃねエのか」

ヤバい冷や汗が……生一方通行さんカッコいいけど、やっぱり怖いな。眼光がヤバい。

「つうかよオ、オマエ」

「ひっ！？」

「何で絡まれてたりしてたんだア？」

「多分だけど……私が最近超能力者判定されたからじゃないかしら」

「あア八位か。オマエ確か……座標移動って能力だったよな？」

「そうそう」

「遠目から見てたが、何でこんな雑魚共の相手なんかしてんだア？ オマエの能力だったら逃げる事も容易だよなア。ひよつとしてサドステイックな人だったりするんですかア！？ ギャハハッ！」

この人のツボが分からない。

ん、よく見るとコーヒーが沢山入ったコンビニの袋持ってる。おっとそっぴい私の目的はコンビニに向かう事だった。危うく忘れるところだったぜ。

てか、普通に会話出来るとは思ってた。まだ実験開始前から大分性格が丸いのかな。

「逃げ続けてたらキリが無いと判断しただけよ。適度に制裁してたら絡んでくる輩の数が減るかなと思ってるのだけど」

「なるほどねエ。イイ判断だ」

「そう?」

「オマエの場合はな」

「え?」

「オマエ八位だろ? 絡ンでる輩の思考は大体分かる。恐らく『序列が一番下の超能力者なら勝てる』とかだろ?」

その通りだけど一方通行の笑顔って何か怖いな。  
それにしても、さっきから私ビビりすぎかも。

「ズバリ、その通りよ」

「まアさっきも言った通り、オマエの場合は適当に弾いてたら敵も減っていくだろオナ。だが、俺の場合は違いエ」

「『学園都市最強』だから?」

「そオだ。学園都市都市最強の座を狙う奴等はいつまでも蛆虫みてエに沸きやがる。ああいうクソ共は正直どうしようもねエな」

「大変ね」

「今んところは互いになア。……久々に長話してたら眠くなっちゃまった。ンじゃな」

私の隣を通りすぎながら一方通行は暗闇へと歩いていった。

あー、少ししか話してないけど何か貴重な体験したような気がするわ。

一方通行の言う事はマジであってほしいな。正直な話、絡まれる度に相手ボコボコにするのを一年くらい繰り返してたら精神が病みそうだ。

そういや一方通行はこの後『無敵』を目指す事になるんだよね……  
んん、今日はもう色々と考えないようにしよう。コンビニだコンビニ。

「結標淡希が戦闘を終了。データは取りました。また、一方通行と接触したが特に問題は無し」

『了解。引き続き監視し、データを取るように』

レベル5になってからというもの……ん？ あの白い人物は……！？（後書き）

結構容赦がない結標さん。

今回はちょい原作ブレイクですかね。

## 友達とお買い物に行きます

いやあ昨日は変な奴等には絡まれたけれど、一方通行に会えて話まで出来たし良い日だった。

今日は学校が休みだということことで白木さん達と遊ぶ約束してるんだよね。本日も良い日になってくれる事を願おう。さて、そろそろ出るか。

あー。良い天気。本日の待ち合わせ場所は Seventh mist セブンスミスト という服屋である。

確か虚空爆破 グラビトン 事件が起こった場所だよな。いや、起こった「た」って語弊があるな。これから三年後に起きる事件なのに。

そういや、爆発から美琴達を守る上条さんのあのシーンには思わず KAKKEEEEEEEEEEEEEEEEE! と叫んでしまった記憶があるなあ。

ていうか超電磁砲の上条さん格好良すぎなんだよ、うん。もちろん禁書でも相当カッコいいけど。

「あー!!」

「は?」

うわ、霧ヶ峰だ……

コイツ、私が超能力者になってからますますウザい絡みしてくるようになったんだよな。

「俺は……俺は……まだお前に負けてなんかないんだからな!!」  
次の身体検査で必ず超能力者になってやる! 覚悟しとけよ!!」

言うだけいって走り去りやがった。何なんだ本当に。  
あと覚悟って何を覚悟すればいいんだよ。はあ……朝から疲れる。

私が集合場所に到着した時には既に白木さんと神木さんは待つていた。

テレポ使ってきたんだけど二人共早いな。

「ごめんなさい。待たせちゃって」

「あはは、気にしないで。こっちが早く来すぎただけだから」

「一応、能力使って来たのだけれどね。前も待たせてしまった記憶が……」

「結標さん真面目すぎだよ。そんなの気にしないでいいって。それより……」

ズイツと身を乗り出してこちらをマジマジと見てくる白木さん。  
何かデジャヴのような。

「結標さんってスタイルいいのにも露出少ない服ばっかで勿体無いよー!」

「えっ、どうしたのいきなり」

「何ですか、シャツに上着羽織って下はスラックスって! この前も露出少ない服でしたよね! くっそお! 超能力者でスタイル抜群とか羨ましい〜!!」

スタイルが良い、か自覚は無いが三年後には巨乳になる未来が待ってるのは知ってる。

んーと、この娘は体型にコンプレックスがあるのか? でもスレンダーな体型で……ああ胸か。美琴さんを思い出すな。

……で、どっとう反応すればいいんだ私は。

「し、白木さん。結標さん困ってますよ?」

ナイス! ナイスフォローだよ神木さん。この娘マジ良い子だよ。

「はっ! ご、ごめん結標さん」

「別に気にしてないわよ。さ、行きましょう」

三人まとめて座標移動つと !

「本当便利な能力だよねー」

「結標さん、ありがとうございます」

「どういたしまして」

「不幸だー!!」

「「「!?!?」」」

突然の男の絶叫。

おいおいこの台詞はまさか。

「ぬおおお!?!? 何なんですかこの自販機は! 俺の五千円を返して!?!」

やっぱり上条さんだー!!!

何やら返却スイッチをガチャガチャしながら慌てふためいている。

うわぁ……確かに不幸だな。

「な、何あの人……」

「どうかしたの？」  
「ちよっ！？ 結標さん！？」

私が声を掛けると上条さんはこっちにくるりと顔だけを向けた。  
ほう、一方通行は整った顔立ちって感じたが、上条さんは男前だ  
な……現在涙目だが。

「この自販機が俺の五千円札を」  
「飲んじやったわけ」  
「……うう」

上条さんから負のオーラが出始めちゃったよ。  
可哀想だから私の能力で取り返してあげるか。対象は見えないけ  
ど、なんとかいけるか？

「はい」

ふう、無事に取れた。  
手にある五千円札を上条さんに差し出す。

「えっ？」  
「だから、どうぞ」  
「えっ、これ」  
「私の能力で取り返したのよ。触れずに対象を移動させる事が出来  
る空間移動の亜種みたいな能力と言えば分かるかしら？」  
「おおおお……お」  
「お？」

「ありがとうおおおおおお！！！！ 本当にありがとう！！！！」

ガシィッ！ と上条さんが私の両肩を掴んできた。

え、ちょ、まさかこんなに喜ばれるとは。

「あ、ああっ！ ごめん！」

顔を赤らめながら上条さんは手を慌ててどけた。

今が原作の時系列だったら押し倒されていたかもしれないな。危ない危ない。

「と、とにかくありがとう！ いつか必ず恩はさせてもらおうから！  
！ げっ！ もうこんな時間だよ、お昼の特売が始まっちゃう！  
じゃあまたな！」

……あ、行ってしまったよ。

というか名前すら聞かないでどうやって恩返しするんだろう。

それにしても、恩返しねえ。『貴方の髪の毛をツンツンモフモフ  
させてください』だなんて口が裂けても言えないよな。

私はこの表面上のクールキャラをこれからも続けるつもりだから  
な。

「何だったんだろうあの人の……」

「嵐みたいな人でしたね」

後に世界を救う英雄だよ。

「よっし、絵里。あそこ行こう」

「どこですか？ ええっ！？ 下着コーナーじゃないですかあ！」

「結標さんはどうする？」

「私は別に買う下着は無いわね」

「私もありません！」

「そうですね。よし、絵里行くよ！」

「何で、私は強制連行なんですか！」

神木さんグッドラック！

さて、私は適当に彷徨くか。

「結標淡希……今日は友人を連れているのか。やるなら今日だな」

白いパーカーを羽織った男は無線を取り出して耳に当てる。

「今から動くぞ。獵犬部隊B班をこちらによこせ」  
ハウントドッグ

『了解しました』

「いやー結標さんのおかげで沢山買っても苦労しないわ」

「今日は本当にありがとうございました」

「いいのよ。役に立ってこそその能力だし」

神木さん十袋分も買うとかパないわ。私なんか冬用にマフラーと手袋しか買ってないのに。

「それじゃあ今日はもう解散しますか」

「二人共、家まで送ろうか？」

「いえいえ！そこまでしてもらったら悪いです」

「こんくらい余裕だよ」

「そう？　じゃあ明日学校で会いましょう」

正直神木さんは余裕に見えないが……本人達が遠慮してるならまあいいや。座標移動つと

やー。今日も良い一日にだったわ。

暇だな、夕方のバラエティー番組でも……あれ、電話？  
神木さんからだ。どうしたのかな。

『結標淡希』

「ッ!？」

男の声だと……？ 神木さんの父親か何かか？

『いいか。一度しか言わない』

「ていうか誰よ？」

『お前の友人達は預かった。返してほしければ一人で第三蒸気機関  
研究施設に來い。断れば友人達の命は保証できない。以上だ』

「……ち」

く、くそッ！ 私が神木さん達を送つてれば……ッ！

おいおい、今日は良い一日になると思つてたのに。はぁ……全く。

犯人の野郎……誰だか知らないが全裸で大通りに埋められる覚悟  
は出来てるよなあ!？

**友達とお買い物に行きます（後書き）**

今回は上条さんも出してみました。

閲覧、感想、お気に入り、評価等、超ありがとうございます！  
超  
書く原動力になります！ と絹旗さんもいっています！

私に果たし状？ いいぜ乗ってやるよ全裸にして繁華街に飛ばされる覚悟は当然

『第三蒸気機関研究施設』か。調べたところそれは第十九学区にあるらしい。

……白木さんも神木さんも優秀な能力者だ。という事はその二人を連れ去った犯人はかなりのやり手だと想定できる。

まあ一方通行みたいなどうしようもない能力でもない限り、なんとかできるだろうとは思う。

にしても私の休日を滅茶苦茶にしゃがって。私に恨みがあるのかは分からないが、犯人の野郎……タダでは返さないぞ……

ここが『第三蒸気機関研究施設』か。

ふーん。見たところもう使われてない施設みたいだ。中も広いみたいだし、いかにも戦闘をしやすそうな場所だな。

一人で来いとか明らかに罠フラグですよね。中に入る前に一応、自身を転移させる演算式を立てておくか。

「来たか……結標淡希」

「スクラップになる覚悟は出来てるかしら」

中に入ると白いフードを被った男が五メートル先の地点で待ち構えていた。前髪が長く顔がはっきり見えない。

いきなり敵に遭遇するとはね……他に人間はいないようだな。

周りにあるのはパイプとか大型の機械ばかりか。学園都市にしてはローテクな場所だよなあ十九学区って。

ま、内装自体は広いみたいだし転移して埋まる心配はないな。私

はね。

「と、その前に私を人質を取ってまでして呼んだ意味は何？」

「答えると思うか」

「じゃあ人質の場所は？」

「愚問だな」

「交渉決裂って事でいいの？」

「ああ」

私が懐中電灯を構えると同時に、相手の足元から二メートル程の渦潮らしきものが発生した。

なるほど、水流操作系の能力者か。白木さん達を捕らえるぐらいだから強度は高いんだろうがとりあえず

「いくぞ、レベルふ……あがつ!？」

首まで埋まってる。

ちよろすぎるだろ。

まさかこれで私に一騎討ちを挑もうとは……正直拍子抜けだ。

って、ヤダ!?! これじゃあまるで私戦闘狂みたいじゃないか。

普通ここは問題があっさりと解決したって事で喜ぶところだろう!

「さあ、このまま頭に何かぶちこまれたくないなら答えなさい。まず、白木さん達はどこ?」

懐中電灯の光でフード男の頭に標準を定める。本気で頭にコルク抜きをぶちこむ気はないが脅しにはなるだろう。

「俺を……」

「俺を？」

「甘く見るなよ……ッ！！」

突然ゴツ！！と男の周りが吹き飛ばされた。当然、地面も抉り飛ぶ。

私はとりあえず、破片が当たらないように一旦後方へ三メートル座標移動する。

「俺を見くびるなよ」

もうもつと立ち籠める白い霧の中から白いフードの男は姿を表した。

水流操作で地中ごと地面を吹き飛ばしたのか……中々のパワーだな。

しかし、地面に埋めても駄目ならこうすればいいだけだ！

「があッ!?!」

右肩にコルク抜きを転移してやった。

馬鹿な奴だな……空間移動系が相手ならこういつ攻撃が飛んでくるのは分かってたろうに。

「もう一度聞くけど、白木さん達の場所はどこ？」

「……………」

どうやら答える気はなさそうだな。

それにしても、何が目的なんだコイツ。私に対抗する策も無いよ  
うだし、逃げる素振りも見せない。

不気味だ、さっさと口を割らせてやる。

次はコルク抜きを足に転移！

「遅かったな」

痛ッ!?

「え……?」

何で。何でだ。

何故私の腕にコルク抜きが刺さってる……!?

「遅れてすみませんでしたね」

「ッ!？」

後ろに誰がいる!?

振り向くと、眼鏡を掛けた不健康そうな黒髪の男が立っていた。  
まさか、コイツに十一次元座標の演算式が狂わされたのか……!?

「くそッ!」

「無駄ですよ」

コルク抜きをコイツの肩に !

演算式では相手の肩にコルク抜きを飛ばすように命令した……だが、今度は私の脇腹にコルク抜きが転移された。

「か、かは……ッ?」

さっきのも激痛だったが、今度のは耐え難い激痛だった。

とてもじゃないが立ってられない……! クソ、ここは無理矢理にでも座標移動を使って一旦脱出を……!

「少し眠っててください」

け、拳銃！？ これはマジでまず……い……

地面に横たわる結標が完全に意識を失っていることを確認した眼鏡の男は携帯電話を耳に当てる。

因みに、先程、結標に浴びせたのは実弾ではなく極めて即効性の高い麻酔銃である。

「木原数多に取り次いでください。ターゲットを拘束した、と」

私に果たし状？ いいぜ乗ってやるよ全裸にして繁華街に飛ばされる覚悟は当然  
結構痛みに弱い主人公。

一方通行「自分に絡む奴等から逃げるじゃなくて倒すという選択肢  
を選んだ時点でオマエは既に戦闘狂だろオが」  
結標「えー……」

あまりレベル5をなめない方がいい

気付くとカプセル式のベッドみたいな物に寝かされていた。

おまけに頭には吸盤式のコードがいくつも取り付けられ、手や足は拘束具のような物でロックされてしまっている。

くっそー……助けに行く側が捕まるとは。しかも一方通行以外ならどうにもなる！ キリッ！ みたいな事考えておいて、名も知らないそこらの能力者に敗北してしまったよ。

あーあ、情けないっいたらありやしないもつ。

「目が覚めましたか？」

突然、ぬつとこちらを誰かが覗き込んできた。

って、コイツは私に拳銃撃ってきたあの眼鏡野郎じゃないか！  
キモい笑い浮かべやがって。

「おっと。能力を使うなんて馬鹿な事は考えてませんよね？ 僕がいる限り、あなたが能力を使用する事は自殺にしかありませんからね」

やはりあの時私の能力の標準が狂ったのはコイツのせいか。

……ん、そっぴや腕や脇腹の痛みが大分、引いてるな。応急措置がしてあるのか。これなら演算をする障害にはならないな。

後は能力使うのに邪魔なのはこの眼鏡男の存在か。

そう思うとコイツの顔を見るだけで腹が立つてくるな……

不快になってきたので、眼鏡男から顔を逸らし、目を動かして周辺を確認してみる。

すると、こここのフロアを見渡すような一室が上の階にポツンと存

在しているのが確認できた。

そして、その窓ガラスから何者かがこちらを見ている。

短い金髪に顔の左側に入った刺青。そして白衣の下に来ている初期一方通行のしましまシャツに良く似た服。

うん。どう見ても木イイ原くウウウンだよなこの人。

ところで木原くんっておっさんの割には中々カツコいいよな……  
って何を言ってるんだ私は。

この状況、どう見ても木原数多は私の敵だ。まず木原を倒す事を  
考えねば。

『目エ覚めたかよ座標移動。無様な姿だなあ、お似合いだぜエ？  
ギャハハッ！』

最初の言葉が罵声とはさすが木原くん。

『おいおい起きたんなら何か恨み言の一つでも喋れよクソガキ。折  
角、そっちのマイクもオンしてやってるのによ』

ああ、この声スピーカー越しの声か。

んじゃあ、木原くんのお言葉に甘えて恨み言ではないが質問する  
か。

「……まず、私をここに連れてきた理由を。そして白木さん達人質  
の居場所も教えてくれるかしら、あとここは何処かもね」

『あ？ 何偉そうに質問してんだ？ 自分の立場分かってんのかク  
ソボケ』

えー……なんか怒られたんですけど。理不尽だ。  
てか、木原くん沸点低いなあ本当に。

『全くよオ危機管理能力つてのが無えのかよ。これだからクソガキは見ててム力つくんだよなあ……まあ、テメエをここに連れて来た理由ぐらいなら話してやる。一言でいうと『0次元の極点』だ』

はぁ？ 何それ知らない。

禁書で次元に関わる語句で知ってるのは空間移動に使う『十一次元座標』とキヤーリサ様が使っていた『全次元切断術式』ぐらいだ。『0次元の極点』なんか知らないぞ。

あれか、私は禁書原作で読んだのは新約一巻までだからその先の巻に出てくる要素か？

「『0次元の極点』？ 聞いた事が無いわね」

「分かりやすくテメエに説明する。よおーく聞いとけよ？ まず、この世界においてn次元の物体を切断すると、断面はn-1次元になる。三次元ならば二次元、二次元なら一次元。ならば一次元を切断するとどうなる？」

「0次元になるのかしら？」

『そうだ。まずこれが基礎理論だ』

結構適当に答えたが正解なのか。

それにしても正直な感想、凄まじく机上論すぎる。そもそもどうやって一次元を切断するんだよって話だよ。

……え、まさかそれを私にやれって言うんじゃないだろうな！？

「まさか、私をここに連れてきた意味って」

『そオだよ、テメエの座標移動を使って一次元から0次元を取り出そうってこった。出来る確証は無いがなあ……クハハッ！』

ヤバイこのおっさん本気だぞ。

さすが一方通行というチート能力を開発しただけはある。考え方

が普通じゃないよ。

『空間移動系の能力者の中ではテメエがナンバーワンだろ？ そういう事だよ。本来なら第四位の<sup>むぎのしずり</sup>麦野沈利<sup>メルトタワー</sup>の原子崩しが持つ、量子論を無視して電子を曖昧なまま操るといふ性質を利用して1次元を切断してやるうと思つてたんだがなあ。あの女は暗部にいて拘束するのは色々と面倒なんだよ。だからまあ最初に原子崩しと同じ超能力者で空間移動系能力者のテメエで実験しようつて話だ。分かってくれたかなあ！？』

ああ、とりあえず麦野さんに手を出さなかったのは正解だと思うよ。

木原が操る獵犬部隊じゃ麦野に返り討ちにされるのが関の山だしね。

それはともかく、まだ色々疑問がある。

「その『0次元の極点』つてのを手に入れられたとして、それで具体的に何が出来るの？」

『0次元と三次元の世界は対応しているが、三次元世界の広さに対して0次元は「一点」しかねえんだ。0次元の「一点」という『世界の全て』さえ手元にあれば、三次元の全ての座標とリンクが可能になる。ワープやレポートの為の中継ポイントにできるってわけだな。テメエが使つてる座標移動と違いえのは、その力は距離や重量に全く左右されないって事だ。銀河の果てまで飛べる能力者など存在しねえが……この方式なら欲しい物、必要な物は銀河の果てからでも手元に引き寄せ、いらぬ物、嫌いな物は全部まとめて銀河の果てまで吹き飛ばすことが出来る……どうだ、素晴らしいと思わねエか？』

なるほどね。本当に木原は他の研究者と比べて発想が飛んでるわ。

……ま、この理論が仮に確実な物だとしても人質を取ってまでこんな事をしようとしてる人物に協力する気は起きないな。

『話はこれで終わりだ。じゃあちゃっちゃと実験装置になってもらおうか座標移動』

「実験装置？」

『なあに簡単な話だ。これからお前の脳に細工して能力を使うだけの人形になってもらおうってわけ。勿論、壊れるまで使ってやつから安心しろ』

清々しい程に外道っすね！！

あれ……ひよっとして私、人生積んだくね？

『あと三分で座標移動の脳を弄くる装置を起動させる。三澤、座標移動をお前の能力で押さえ付けておけ』

「了解」

手と足は動かせない。この状況を打破するには能力を使う以外に方法が無い。

だが、能力を安全に使うにはこの三澤って奴をどうにかしなければならぬ。

さて……本当にどうしよう？

三澤、コイツの能力が今、私が思い付いた能力だったとしたら。

仕方無い、もう後には退けないんだ……ここはいつちよ賭けてみるか！

みさわじん  
三澤賢。

ハイブクラッシュ

彼の能力は座標異動という空間移動系能力者相手にしか効果が無

いというものである。

この能力は対象が組み立てた十一次元座標の演算式を読み取り、それに乗っ取って相手を自滅させたりといった風使用する。組み立てられた演算式そのものを利用するので相手は違和感に気付けないという空間移動系能力者にとっては鬼のような能力である。

ただ、直ぐに使用出来るわけではなく、対象の演算式を記憶する時間を数分ほど要する。三澤は最初この能力を結標に対して使用する時、水流操作を使う白いフードの男に頼んで困らなってもらった。更に、コピーした演算式を使えるのは約五分であり、時間がすぎたらもう一度対象の演算式を記憶しなければならなくなる。

「！」

結標が能力を使用しようとしているのを感知した三澤は一瞬、驚いた表情を浮かべたがすぐにニヤリとした笑みを作る。

「馬鹿な人なんですね。いい加減に学習すれば良いものを」

三澤は結標に対して座標異動を使用する。

数秒だけ空間が歪んだ後、三澤はうつ伏せで床に勢い良く倒れた。

ふう。賭けに勝ったか。とりあえずこのカプセル式ベッドから脱出と！

まず、私は三澤の能力は私の組み立てた演算式を奪って演算して此方を自滅させるといった能力だと予想した。

だとしたら話は早い。

演算は相手が負担するのだから、体に深刻な負担がかかるほどの重量を転移させる演算式を組み立てて、三澤を自滅させてやればいければいいと考えたのだ。

もう本当に、かなり危険な掛けだったな。

三澤の演算力が足りなくて物体の大量転移もキャンセルされたよ  
うで安心した。この建物には白木さん達がいる可能性が高いからね。

「恨まないでよね。ま、あまり超能力者をなめない方がいいって事  
よ」

床に倒れて鼻血を出したままビクンビクンと痙攣している三澤に  
声をかける。

なんかヤバい後遺症とか残りそうだけど、知ったこっちゃないな。  
私は敵の心配をするほど優しくはない。

さて、後は木原をどうするかだな。

あまりレベル5をなめない方がいい(後書き)

主人公は禁書のゲームの知識はないようです。

結標さんが自分の演算式が狂わされたとかいってたのは彼女が他の空間移動系よりかなり鋭かったからです。

つまり、三澤くんにとっては予想外だったというわけですね。ドンマイw

あといつの間にかお気に入りか五百超えたりとかなり驚きました。読者の皆様ありがとうございます!!

## 安定の木原くん

あ……さつきから何か足りないかと思ったら愛用の軍用懐中電灯が無いじゃないか。

恐らく第十九学区に置いてあるままか、コイツ等に回収されたか。ついでにコルク抜きも無い。

はあ、いずれにしても探してる暇は無さそうだ。無かったら後で神山にまた調達してもらえばいいし。

とりあえずは　！

「木いいい原くうううん」

木原に白木さん達を返してもらわないとね。

背を向けている木原の背後に座標移動すると、何かしらのコンソール（多分、十中八九私が寝かされてたカプセルベッド式の装置のやつだろう）を弄っていた木原がこちらを面倒臭げにこちらに振り向いた。

「あ？　何勝手にゲージから出てんだア、モルモットちゃん。さつさと定位置に戻れよ」

ええ！？　何でこのおっさんこんなに余裕なの？　昔は一方通行の顔を見る事さえビビってたインテリちゃんだったんだよな……時の流れって不思議だなあ。

「三澤だっけ？　アイツはもう私が倒したわよ。だから能力を使うのにもう支障は出ない。貴方を地の底に埋める事も容易なのよ」

「んな事あ知ってんよ。ったく折角雇ったのに本当に使えねえクスだなあアイツ」

「なら、今の状況は掴めてるんでしょ？ 白木さん達の居場所を教えなくてもらおうかしら」

「ハハハッ！ 急に強気になったなあモルモットちゃんよお！ テメエこそ今の状況分かってんのかあ！？」

と、木原の背後にあるモニターに映像が映し出された。その映像を見た瞬間、血の気が引いた。

「し、白木さん、神木さん……！」

モニターに写っていたのは紛れもなく白木さんと神木さんだった。手足を縛られ、口には猿轡 さるぐつわ を嵌められてグツタリと転がっている。

これだけでも結構ビビるが、二人は拳銃を突きつけられていた。この武装してる男達は服装からして猟犬部隊の隊員と思われる。

「お友達を助けたいなら大人しく実験装置になるこつたなあ」

「くっ……！」

「おつと、妙な動きはよした方がいいんじゃない？ ここのフロア全体の映像は全部向こうに行ってる。お友達の脳味噌をぶちまけたくないなら、さっさとゲージに戻る事をお勧めするぜえ？ モルモットちゃんよ」

やっぱり木原くんだな。外道な上に抜かりが無い。

ここの映像を送っている機器ぶっ壊しても、恐らく『向こうで木原に何かがあった』と処理されて最悪の結果を招く可能性が大だな。実力行使が駄目なら……ここは話し合いで解決するしかないだろ。

「分かった。けれど、一つこっちの条件を呑んでもらってもいいかしらっ。」

「あ？」

「白木さん達を解放してくれないかしら？」

まあ、白木さん達が解放されたのが確認出来次第、即効でここから逃げますけどね。

ついでに木原くんは埋めてやる。

さてさて、これで木原くんはどう動くかな、

「おい、一発撃つておけ」

ダァン！ と画面越しから発砲音が聞こえた。

『ヴうつ！？ んんんーッ！！』

「嘘……でしょ……？」

肩を撃たれて衣服に赤い染みを作った白木さんがで地面の上で身悶えている光景がモニター画面に映し出されていた。

猿轡で口を塞がれているせいで満足に悲鳴すら上げられないのだろつ。

あんまりにもな光景に一瞬、頭が真っ白になった。その後木原を地面に埋めたくなる衝動に駆られたが、なんとか踏みとどまる。

いかん、ここでキレたら白木さん達の命は無い。

よし、深呼吸しよう深呼吸。落ち着こう……落ち着け私。

「テメエさあ。あんまり大人をおちよくるんじゃねえぞコラ。テメエみたいなモルモットが俺と対等に交渉出来るなんざ考えてんじやあねエぞ。……あー、ムカついたわマジで」

「貴方、下手したら今の行為で自分が終わってたかもって分かってる？ 白木さん達を人質にしてるつもりなら丁重に扱いなさい。」

「丁重お？ ギヤハハツ！！ 人質は二匹いるんだぜえ？ 何なら今から一匹殺しても俺は構わないんだぜえ！？」

うわ……これもうサイコパスとかの域だわ。

それにしても良心の欠片もないとは。心の根から悪党だなコイツ。いや、木原らしいっちゃ木原らしいんだけどね。

「早く元の位置に戻ってくれないかなあ！？ よし、じゃあ今から十秒カウントダウンをしてやる。十秒過ぎたらガキを一匹ぶち殺す。はい、いーちい！」

くそおおおツ！！ 三澤潰して、一つ問題を解決したと思ったら更に困難な問題が表れやがった。

あああ！ もう木原に従うしかないのか！？

「にーい！ さあーん！ 四、五、ろくう！」

「わ、分かったわ。今すぐ……」

『ぐあああつ！？』

えっ？ 今なんか男の悲鳴が聞こえなかったか。

あれ、何か猟犬部隊の人達倒れてるんだけど。んん？ 何か二人組が乱入してきたぞ！？

『おい、大丈夫か白木！ 神木！』

『撃たれてる。……早く外へ運ぼう』

『頼んだぞ。俺はもう一人を助けに行く』

霧ヶ峰……それに、上条さん！？

「くそつたれが！！」

木原の怒号が聞こえ、いつの間にか白い煙が発生していた。木原の姿はそれによって覆い隠されてしまった。

ちっ。懐中電灯無しで視界まで潰されて能力を使うのは少し酷……か。

残念だなあ木原くんを埋めてマゾ太くんにしたかったのに。

この煙が有毒ガスだったりしたらヤバいし、とりあえずこの部屋から座標移動で一旦退避　　！

とりあえず、あの部屋に充満している煙が見えなくなったら再び突入しよう。

視界が悪い場所から木原に攻撃されたら結構マズイね。仮に毒ガスが残ってたとしても上着脱いで鼻と口塞いどけば大丈夫でしょう多分。

再突入したらコンソールを操作してあのモニターに映ってた場所がどこかを調べよう。

待っててよ白木さん達、今すぐ助けに行くから。

霧ヶ峰と上条は第十九学区にいくつか点在する廃工場の中に潜入していた。

廃工場といっても外観だけで、中身は多くの最新設備が設置されている、木原が率いる猟犬部隊のアジトの一つだが。

霧ヶ峰が結標達の危機に気付けたのは、たまたま白木と神木の二人が白いフードの男と、その部下と思われる武装した集団に連れ去られようとしていたのを目撃したからである。

すぐに助けに入った霧ヶ峰だったが、白いフードの男が予想外に

強く、一旦退避せざるを得なかった。

それでも諦めずに追跡したおかげでここまで辿り着けたわけだが。

「分かった。この二人を外に連れて行って救急車を呼んだ後、また戻る」

「任せたぞ上条。というか、すまないな。見ず知らずの俺に協力させちまって」

「いいって。進んで声をお前にかけたの俺だし」

白木を背負い、なんとか立っているが足がおぼつかない神木に上条が声をかける。

「歩けるか？」

「なんとか。それより白木さんを早く外に……！」

「ああ。よし、行くぞ！」

上条は自分の頬を両手で叩いて気合いを入れる。

この殺風景な割には無駄に広い部屋を見付けるのに三十分くらいの時間がかかった。退路が分かっている今でも外に脱出するには十五分くらいかかるだろう。

「行かせるか」

「お、お前は」

「クソツ！ こっちにも！」

霧ヶ峰の方は白いフードの男が、上条の方は武装した猟犬部隊の数人の隊員がそれぞれ進路を塞いでいた。

「どけっ……！」

「ふん」

霧ヶ峰が叫んで腕を上げた時には、既に白いフードの男の前に人間一人隠す程の大きさの水の壁が出現していた。

三億ボルトもの出力を持つ電撃が霧ヶ峰の手から放たれたが、それは水の壁によって阻まれてしまう。

「クソツ！ どうして俺の電撃が効かないんだ！？」

「俺は純水を操る。全くとは言わないが純水は電気をほとんど通さない。諦めろ、お前達全員でかかってても我々には勝てない」

奥歯を噛み締める霧ヶ峰と、銃を向けられ後退りしそうになっている上条。

それを見て勝利を確信した猟犬部隊の面々だったが。

「『お前達全員でかかってても我々には勝てない』ねえ。なら、私がこの人達に加勢したらどうなるのかしら？」

この場に座標移動してやってきた結標が薄く笑っていた。

## 安定の木原くん（後書き）

外道な木原くんが大好きです！

霧ヶ峰に上条さんが協力した経緯は次回に書く予定です。と、いってもそんなに深い内容ではないですが。

あと次回で中二編が終わると思います。

裏の人間は裏の人間が片付けるのね

「結標！ 無事だったか！」

「結標……ってアンタだったのか！ よし、五千円札の借りを返す調度いい機会だ！」

敵は銃持った猟犬部隊の隊員六人とあの時の水流操作の白フード男か。

まずは、退路を塞いでる猟犬部隊隊員から埋めるか。私は上条さんを移動させる事が出来ないしな！

「結標淡希……お前どうやって!？」

猟犬部隊達がちゃんと壁の一部になっているのを確認してから、私は白フード男に向き直る。

はい、お前なんかに構ってる時間あんまりないからさよならっとな！

「さ、さすが超能力者……あのフード野郎を一瞬で」

「霧ヶ峰、上条君を外まで連れてってあげて。私は白木さんと神木さんを連れて能力で脱出するから」

「は!？ 何でそんな面倒な事するんだよ！ お前の能力だったら俺と上条も転移するのは楽勝だろ!？ ……あれ？ ひよっとして助けに来た事を怒ってる？」

「違う。上条君が私の能力を打ち消しちゃうからよ」

ちらつと上条さんを見ると彼は眉を顰めてこっちを見ていた。ありゃ、やっぱり怪しまれたかな？

まあ後で適当にごまかしておこう。

「アンタ、何で俺の右手の事を？」

「上条、マジなのか」

「え？ ああ、マジだけど……」

「そういう事だから。上条君じゃ銃持つてる人間はキツイから、霧ヶ峰は上条君の護衛お願いね」

……というかつい先ほどから頭にチリチリした痛みが走るようになったんだけど何なんだろうねコレ。

あれ、なんかこういふ感覚を起こさせる装置が何かあった気がするんだけど……嫌な予感しかない。

「くそ、木原の野郎！ このタイミングでAIMジャマー だと！  
？ 地面から出られなくなったじゃねーか！！」

えーあいえむじゃまー？ ははっ。

ぎゃあああああ！？ 最悪だあああああ！！

「くそつたれ。まさかコイツ（AIMジャマー）を使う事になる  
とはな」

とある一室で木原は盛大な舌打ちをした。下手したら今見ているモニター画面に拳を叩き付けかねない剣幕だ。

「大体『0次元の極点』を手に入れるコストだけでも相当だったの  
によオ。その上に『AIMジャマー』まで使っちゃったら電力消  
費や演算装置代も馬鹿にならねえっつーの……！」

木原が結標を使って行おうとしている実験は学園都市内でも完全に違法である。

だからコソコソと隠れて実験するためにわざわざ辺鄙な第十九学区の廃工場なんかを選んだのだ。

だが、この場所には電力が他の学区に比べて少ないというデメリットがある。

AIMジャマーは『キャパシティダウン』のように能力者の演算そのものを阻害する効果は無い。

この装置は能力を暴発させて能力者を自滅させるといった方法で用いる。因みに能力の強度が強ければ強い程、自滅の可能性が高くなる。

音をシャットアウトすればいいキャパシティダウンと違って防ぎようのない強力な装置だが、その分コストも高い。大量の電力と演算装置が必要になっているのだ。

だからこんな電力が少ない場所でAIMジャマーを使っている途中に他の機材を使うと、施設全体がブレーカーダウンしてしまう危険性が極めて高い。

「こんなボロつちい場所でAIMジャマーなんざ使いたくないから座標異動とかいう能力者を雇ったつてのによ。ま、あの使えねえ屑は後でミンチにして豚にでも喰わせるとして、今は座標移動を捕らえる事に専念するか」

まるで見計らったかのようなタイミングで二つの通路から大勢の獵犬部隊が侵入してきた。

木原がジャマーを使ってきたか。

「次から次へとっ！」

「霧ヶ峰！ 今、能力を使ったら！！！」

もう遅かった。霧ヶ峰が放った電撃が暴発して私に  
！？

「大丈夫か！？」

「な、なんとか」

届く前に打ち消された。

上条さんがとっさに幻想殺し（イマジンプレイカー）が宿る右手を突きだして、私を庇ってくれたのだろう。

……危うく仲間には殺されるところだったよ。上条さん、白木さん背負っているのに反応速度ばねえ。

「す、すまん！」

「いや、私も早く言えば良かったわ」

真っ先に、衰弱している白木さんと神木さんだけでも外に連れ出すべきだった。肩を撃たれている神木さんは特に。

霧ヶ峰と上条さんに状況を説明したかったが為に、あんまりにも頭が回らなすぎたか。阿呆だな私は。

武装した数十人の大人相手に今や能力を使えないに等しい中学生数人が勝つなんてどう考えても無理。

周りに仲間がいないなら暴発覚悟で能力使っていたかもしれないが……もう私が大人しく投降するしかこの場を押さえる方法はないな。

降参の旨を伝えようと私が口を開こうとした瞬間、このフロアが一気に暗くなった。

「停電……!?!」

思わず天井を見上げると、一部分に亀裂が入っていた。何のアクションの起こせずに啞然としていると、そこが砕けて一人の男が天井から降りてきた。

崩れた天井から指す日の光がその男を照らす。

「垣根帝督!?!」

思わずその人物の名前を口に出してしまっていた。

長身で整った顔立ち。モデルと言われても全く疑えない風貌の垣根は数十人の猟犬部隊達を一瞥すると、ニヤリとしながら髪を掻き揚げた。

うわぁ……この仕草はイケメンにしか許されないよな。

「ったくよ。裏の糞野郎がカタギのガキに手え出してんじゃねーよ」

垣根が軽く腕を振ると天井の穴に繋がる階段状の白い物体が組み立てられていく。

これが垣根の能力、未元物質<sup>ダークマター</sup>か。やはり学園都市二番目の能力だけあって応用性も半端ないな。

お、垣根が能力をまともに使ってるって事はもうジャマーの効果は無いようだな。よし、まずは上条さんに背負われている白木さんをこっちにアポート！

「ん？ あれっ?」

「上条君、白木さんと神木さんは私が連れて脱出するから。貴方達はその白い階段みたいなのを使って脱出して」

「分かった！ 行くぞ霧ヶ峰！」

「オラ、さつさと行けテメエ等。俺の戦いに巻き込まれる前にな」  
「誰だか知らねえけどサンキューな！」

霧ヶ峰と上条さんが未元物質製の階段を急いで駆け上がる。逃がすまいと銃を向けようとすする猟犬部隊もいたが、そういう奴等は全員地面に叩きつけられていく。恐らく垣根の不可視攻撃だろう。

ここは垣根に任せるか。私はさつさと白木さん達とここから脱出しなければな　！

救急車に運ばれていく白木さんと神木さんを見送った後、私は一先ず胸を撫で下ろした。

「主犯は捕まっ たんですか？」

警備員アンチスキルで未来の一方通行の保護者の黄泉川よみかわに上条さんがさつきから質問を繰り返している。しかし、どれも首を振られてしまっていた。

まあ相手は暗部でしかも木原くんだしそう易々とは捕まらないよな。

神妙な面持ちのまま上条さんがこちらに戻ってくる。

「しっかし上条もお人よしだよな。走ってぶつかってきた奴に協力するなんてよ」

「だってお前があんな必死な顔で『同級生が拐われた！』とか言うから放っておけなかつ たんだよ！」

なんと、助けに来てくれた理由それだけですか！？  
いや何というか凄く上条さんらしいわ。

「霧ヶ峰、上条君ありがとう。本当に助かったわ」

「同級生を助けるのは当然だ、うん」

「五千円の借りもついでに返せたみたいだし、俺は満足だぜ」

「今回の借りは五千円なんて物じゃないわよ。私や白木さん達の命まで救ってもらったんだし。……そうだ、今度このメンバーでどこかに食事に行きましょうか。白木さん達も連れて」

「お、いいなそれ」

「マジですか!？」

「勿論。白木さん達の退院後だけど」

「やっと不幸な上条さんにもラッキーイベントが……!!」

ふふ、予想以上に喜んでくれたな。

……右手の事知ってる理由はネットで見付けたとか適当に嘘ついとけばいいよな。

「結標、お前もさっさと救急車に乗るじゃん」

あ、そついや私も一応怪我人だった。

裏の人間は裏の人間が片付けるのね（後書き）

最近感想増えてきて嬉しいです。

お気に入りやポイントも凄く励みになってます。

ぶっちゃけ結標さんはまだまだですね。まあまだ第一段階目の強化だから仕方ないね

おいしいところは垣根が持つていく。

今回は結構飛んで霧ヶ丘女学院入学編になります。

ここまで読んでいただきありがとうございましたm（――）m

## 【おまけ1】

ここまで出てきた能力の説明をざっと

【発火豪雨】……白木の能力。

直径一センチ程の火炎の数多の粒を飛ばす能力。普通の発火能力者が行う攻撃より避けにくい。

強度は4

【心理調整】……神木の能力。

相手の精神状態を不安定にさせたり、味方の精神状態を良くしたり出来る補助向きの能力。

強度は3。

【座標異動】……空間移動系能力者がいないと効果を発揮しない能力。

相手の演算式を奪って色々と誤差を起こさせる。ただし演算自体は自分が負担しなければならぬ。

強度は3くらい。

【水流操作】……白フートの男の能力。純水を操る。

用途は壁を作ったり、相手に叩き付けたりと色々。

強度は4。

霧ヶ峰の能力はまたいつか説明します。

## 霧ヶ丘女学院に進学しました

正史通り、私こと結標淡希は霧ヶ丘女学院に進学した。

霧ヶ丘は能力開発ならあの超能力者を二人も保有している常盤台と肩を並べる程のお嬢様学校である。

そして学園都市でも五本指に入る超名門校である。

そう、今から私を待っているのは超エリートでお嬢様な生活なのだ。

ククク……悪い気がするどころか最高だねえ！

「今日から通常授業が始まるんですよ？ ワクワクしちゃいます」

「そうね。確か能力演習がメインだって聞いてるけど。テストの順位も能力で決められるみたいね」

「ふふふっ。昔、常盤台に憧れてた私にとっては最高の学校だよ！」

白木さんと神木さんもお覧の通り、私と同じ学校に進学が決定している。同じ高校に通えて良かった良かった。

因みに霧ヶ峰は長点<sup>ながてんじょうまき</sup>上機学園に進学したらしい。

あそこは能力開発ならNo.1の学校だ。

という事は霧ヶ峰もエリートという事である。エリートのイメージ0なんだけどなあアイツ。

「どういう事です？ 白木さん」

「だって常盤台が汎用性に優れたレギュラー的な能力者の開発のエキスパートなら、霧ヶ丘は再現するのが難しいイレギュラー的な能力者の開発のエキスパートだって能力開発で比較されるような学校だよ！？」という事は……あの憧れだった常盤台と今は肩を並べてるって事になるじゃん、あたし！」

「良かったですねえ」

「良かったわね」

「え……何で二人ともそんなに冷めてるの」

四時限目が終わり、私は自分のクラスに戻ってきた。

「一〜四時間目までずっと能力演習や座標移動という自分の能力についてのレポート書かされて、精神的に疲れがヤバイ。」

おまけに、一年に私の他に空間移動系能力者いないから専用のグランドで一人だったし何か虚しい。まあ、いつか慣れるだろう。

「結標おかえり〜。どうだったよ?」

「率直に言っと、疲れたわ」

「お疲れ様です、結標さん」

「そっちもお疲れ」

白木さんは机に腰掛けて、神木さんは椅子に座って私を待っていた。

「疲れた? 私の周りにはみんな良い人ばかりだったけど……まさか、嫌がらせを受けたとか!？」

「……………」

「凶星か! 凶星なんだな!? くっそー、あたしの大切な友人に何て事を……許さん! 発火豪雨で成敗してくれる!!!」

「気持ちは嬉しいのだけれど。そうじゃなくて」

「え?」

「私の授業、他に誰もいないのよ。ほら、一人だから黙々と演習やらなければいけないじゃない。休み時間も同級生とお喋り出来ないし。これって何か疲れるのよね」

「ご、ごめん。あたしの早とちりだったわ」

「ごつちも紛らわしい言い方して悪かったわ」

「……あたしって結構無神経だよね……」

「え、いやそんな事は」

「も、もう！ 二人共真面目すぎますよ。それよりお昼休みだし、食堂行きましようよ。学食楽しみだな」

神木さんの言葉に私と白木さんはほぼ同時に首を縦に振った。危うく変な事で空気悪くなるところだったよ。

数年前から相変わらずのナイスフォロ。さすが癒し系といったところか。

「すごい！ バイキングだ凄い凄い！」

「し、白木さん。恥ずかしいから少し静かにしてください」

「あ……ごめん」

おお、ここまで内装も料理も豪華だともはや食堂というより高級レストランだな。

さすがお嬢様学校。白木さんがはしゃぐのも分かるよ。

それにしても混んでるなあ……座れるのかこれ。

「あ！ あそこ空いてますよ？ 座りましようよ」

「ナイス神木！」

本当だ。ちょうど三人分の椅子が置いてある丸テーブルのところが空いてる。

じゃあちよっくら二人連れて移動つと !

「えーとお皿とかトレイはどこかな？」

「ちよつとアンタ達」

「……何か？」

声が掛けられたので後ろを向くと、三人組の女子生徒がそこに立っていた。

「アンタ等一年でしょ？　ここ使っているのは三年か二年のみんなだよ」

「は？　生徒手帳読んだけれど、『一年は食堂を使ってはいけない』なんて校則なんか無かったんだけど？」

「ちよつと白木さん！」

いるんだよなあこういう奴。先輩風吹かせるだけの奴が。

そりゃ上下関係はきちんとしておかないといけないとは思っが、  
こういうのは何か違うと思うんだよね。

「減らず口だけは立派ね……ん？　そこの赤毛ツインテのお前。今年入ってきた超能力者？」

「そうですか」

「ハッ。調度いい。アンタさ、この席譲ってほしい？」

「はい。でも、先に席取ったの私達だけれど」

「ならさあ……力づくで奪い取ってみな。ちゃんとした場所は用意してやるから」

「つまりそれは、戦えって事かしら？」

上等だ。この都市では能力の高さが全て……とまでは言わないけど重要視されてるのは确实。

超能力者の力を教えてやるよ先輩。

戦いの場として結標達が連れてこられたのは空間移動系能力者専用のグラウンドだった。

「うわぁ。確かにこんなところで一人で四時間も演習やってたら疲れるのも分かるかも」

「でしよ」

広いだけでは無く、多くの計測器や、形種類様々な物体も置いてある。

数少ない空間移動系能力者の為にわざわざこんな設備まで有しているとは、さすがお嬢様校というところか。

「さあ、とつとと始めようじゃない」

踝くもろこまで来るような長さのスカートを穿いた、お嬢様校には相応しくないスケバンのような風貌の佐川恭子さかわきょうこが前へと進み出る。

佐川の能力は空間移動の大能力者である。

同じく前へと進み出る結標を見ながら佐川は不敵な笑みを浮かべる。

（超能力者といっても飛距離や転移重量が高いつてだけだろ。実戦は確実に私の方が上に決まってる）

十一次元の理論数値を演算し、佐川は結標の目の前に移動すると同時に拳を振るう。

が、見事にその拳は空振ってしまった。

「じつちよ」

「ちっ！」

後ろから肩を結標にちょんちょんとつつかれた佐川は振り向き様に裏拳を放つが、これも空を切る。

「残念」

「また後ろかよ……！」

それから三、四回同じような攻防を繰り返して痺れを切らした佐川は、仕切り直すために後方に百メートル程空間移動する。  
が、

「そろそろ反撃していいかしら？」

「マジかよ……」

背筋に悪寒が走る。また、結標に後ろを取られている。  
恐る恐ると後ろを振り向くと、結標は依然と腕を組んでそこに立っていた。

「もう止めておく？」

「黙れ！」

拳を振り上げると案の定、結標は座標移動で姿を消した。

だが、ここで佐川はニヤリとする。今までのパターンから察するに

「後ろだ……！」

全身ごと回転させる旋風脚でヒットを狙う。

「正解」

佐川の読み通り、結標は彼女の背後に移動していた。だが、既に脚を振り切った後のタイミングで。

「アンタわざとタイミングを……あがつ!？」

顎に結標の掌底が叩き込まれた。バランスを完全に崩した佐川は不恰好に尻餅を付く。

「テメエエエエエ!! もう許さねえ!!」

絶叫しながら、佐川はスカートのポケットから鉛筆を三本取り出す。

そしてそれを躊躇無く結標の右肩に転移させようとした。

「危ないわね」

しかし、結標は半身になることでそれを躲し、宙に取り残された鉛筆を掴み取った。

目を見開く佐川の足元に鉛筆が座標移動によって二本転移される。

「お返しするわ。私、普段はシャーペンとボールペンしか使わないのよね」

「くそっ!!!」

三本の内、最後の一本が体内に転移される事を危惧した佐川が上へメートル程自身を転移させる。

その途端、佐川の背に重い衝撃が走った。先回りした結標が佐川の背中へと蹴りを放ったのだ。

無様に仰向けの体勢で地面に叩き付けられた佐川は、なんとか起き上がるうとしたが、出来なかった。

いつの間にか袖やスカートなどがコルク抜きで縫いとめられていたからである。

「が……はっ……！？ な、何でさっきから私の行動を先読み出来る！？」

「超能力者だから」

「……！！」

「それより、席を譲る気にはなつたかしら」

「ふ、ふん。嫌だと言ったら？」

「貴方がさっきやるうとしてたように、この鉛筆を貴方の体内に移すわ」

「ちよ、待て」

「で、譲ってくれるんですか？ それとも 譲・ら・な・い・んですか？ セ・ン・パ・イ？」

「ゆ……譲りましゆ」

この後、食堂に行ったが、既に満席になっていて結局購買で食事を済ませたのはまた別の話。

**霧ヶ丘女学院に進学しました（後書き）**

いやぁ出だしに迷いました……

あと結標さん、またパワーアップしてます。

高級サラダって美味しいよね……え？ あの方がお呼び！？

夕飯買いにコンビニに行くのは本当に久しぶりだなあ。

いつもは行きつけの第七学区のデパートの地下にあるコーナーで惣菜を購入しているのだが、今日は残念ながらお目当ての品が売り切れてしまっていた。だから本日は仕方なくそのデパートから一番最寄のコンビニへ来ているのだ。

お菓子類や雑誌の類には用は無いので、さっさと惣菜コーナーへと向かう。

おお、私が求めてたのに近い品があるじゃないか……！ 『地中海生ハムサラダ』が。

これ、レモンベースのドレッシング掛けるとそれはもう絶品なんだよねえ。んーと、この『コーンタラバガニサラダ』も買っているのかな。

……てか、さっきから向こうがガコンガコンうっさいな。何をやってるんだ、

「あ」

「あん？」

おいおいヤバいぞなんか赤い瞳に白い髪の毛の黒白の服着てる怖い顔した滅茶苦茶強そうな人に眼がん付けられたんだけど……って一方通行さんやないかい！

お、思わぬところで再び憧れの人に遭遇しちゃったよワッファイ！

ガコンガコンうるさい音の正体は、買い物カゴに大量のコーヒー投げ込んでた音だったのねワッショイ！

「オマエ……座標移動か」

「ひ、久しぶりね」

「あア？ そオだな。久しぶりだなア」

「つーか私の事覚えといてくれてたのね。さすが学園都市一位の頭脳……記憶力も半端ねえ。」

「それで今どんな感じよ？ オマエの周囲の環境は」

「えーと。な、何の事？」

「はア……自分が前に言った事も覚えてねエのかよ？ ボケ」

「ごめん。本当に覚えてないわ……あと命だけは見逃してくれるかしら」

「ハハツ、物騒オなこつたなア。その調子だと未だに雑魚共にちよつかいかけられてるワケ？」

まさか貴方の方から物騒だなんて言葉が飛び出すとは。

一方通行が言う『私が前に自分で言った事』ってそれだったのか。とつくの昔に解決した話だからすっかり忘れてたわ。

改めて記憶力ばねえっすな一方通行さん。

「その問題ならとうの昔に解決してるわね。前に貴方と話した三ヶ月後には、絡んでくる連中なんてほとんど存在しなくなってたわね」

「やっぱりそオなったか。俺の読み通りだな」

「そういう貴方の周囲の環境は変わったの？」

大方予想はついてるが、一応聞いてみる。

「良くなるどころか悪化しやがったよ。最強の座を狙う糞野郎共は増えるばかりか、俺を質に加えようとする糞野郎やボディーガードになれとかホザク糞野郎も現れるようになる始末だ」

「それは災難ね」

「あーあア。何かいい方法は無いんかねエ」

「冗談みたいに肩を竦めて言ってるが、これはきつと本心なんだろうな。」

本気で自分に歯向かう者を撃退するのに辟易してたからこそ、これから『あの実験』の被験者になる事を決意するんだろうしね。

「……その糞野郎達とお友達になるとか」

「ギャハハハツ！ 面白エ冗談だ」

「や、やつぱり無理があつたかしら」

「オマエの思考回路がなア。それとよオ、野菜ばかり食ってつと早死にするぜエ？」

「あはは。気を付けるわ」

「すみません。肉やコーヒーばかり飲食してる貴方には言われたくないです。」

私が持つてるサラダを指差し邪悪な笑みを浮かべた後、一方通行は会計をしにレジにゆつたりと向かっていった。

大量のコーヒー缶が入った重い物力ゴを細い片手で軽々と持ち上げているが、これはベクトル操作というチート能力が彼にあるからこそ成せる技である。

チートの使い道がセコい？ 知らないよ。

あー、それにしても一方通行との会話は馴れないというか緊張するというか。

あの雰囲気学園都市でも出せるのは一方通行と垣根帝督かきねていとくぐらいだろうな、多分。

(翌日)

本日は休日家でカウチポテトをやる予定だったが、神山に『二週間ぶりに能力の精度を確かめさせるお!!』と研究所に呼び出されてしまった。

精度検査は今までであった自身の転移は勿論、ピッチングマシンで飛んでくる球に対して座標移動を使用させるとか、空気を転移させて真空を作る等、検査方法が来る度に増えてる気がする。

そしてただ今、最後の検査としてトラクター二台……合わせて十五トンくらいの重量の物体を飛ばしてやったところである。

「よし、良い感じだ。前来た時と比べて成果が衰えるどころか伸びてる。自信持っていぞ」

嬉しそうな神山。まあ私の能力を開発したのは彼女らしいし、自然な反応だよな。

「どうも」

「この調子で行くと、その懐中電灯も不要になるかもな」

「そう。結構気に入ってるんだけどね、コレ」

「嫌なら手放さなければいいだけの話だ」

「それもそうね」

ところで今の私は同じ空間移動系能力者に対して、絶大なアドバンテージを持っている。これは話すべきなのかな。

座標異動という能力からヒントを得た技術だが……ま、今はいいか。

「電話鳴ってるぞ。前から思ってたが、着メロとか着けないのか？」

「興味があまり湧かないのよ」

適当に神山へ返事を返しながら携帯を耳に当てる。

「可愛げの無い携帯だな……これも前からだが」

うつさいなもつ。保護者かつつーの。

「私だ」

あれ？ 聞いた事の無い声だ。

霧ヶ峰のイタズラかと思つて電話先を確認すると、非通知だった。

「誰なのかしら？ 貴方」

『学園都市統括理事長……と言えばさすがに分かるかな？ 座標移

動 結標淡希』

高級サラダって美味しいよね……え？ あの方が呼びび！？（後書き）

一方さん！一方さんうおお！！（発狂）

結標さんは一方さんに憧れという感情と同時に畏怖も抱いちゃってますww

ちなみにカウチポテトとは家でテレビみながらゴロゴロする事です。

アレイスターさん、何の用ですか？

『着いたようだな』

「ええ」

学園都市統括理事長ことアレイスターに突然呼び出された私は、現在『窓の無いビル』の目の前にいる。

統括理事長という学園都市で一番立場の高い人物が引き込もっているこのビルは、恐らく全世界で最も安全な隠れ家だろう。

まず、このビルには出入口が存在しない。

だからといって無理矢理、入り口を作って侵入する事も不可だろう。

だって、一方通行が自転エネルギーを借りてまで放った攻撃をぶつけられても少し揺らぐ程度にしか衝撃を受けないくらいだからな。

えーと確か、演算型・衝撃拡散性複合素材（カリキュレイト<sup>II</sup>フオートレス）とかいう素材で出来てるんだっけか？ この建物。

……とにかく、『窓の無いビル』内部に入る方法は現時点でただ一つ。

それは三次元的な制約を無視出来る、空間移動系能力のみである。

『では、私のところへ来たまえ』

「来いって……どうやって？ 適当に転移して辿り着けるのかしら？」

『それもそうだな。今から手順を説明する』

「手順……？」

『まず、前方へ三メートル六十七センチ進め』

てつきり携帯に見取り図とか送られてくるのかと思ったら、まさ

かの口頭。

しかも細かい。出来ない事はないが。

とりあえずテレポすると、パイプがまるで植物の蔦つたのように入り組んでいる空間に着いた。

うつすらとしか光が無いので、これではどこがどこに繋がっているのかほとんど分からない。

こんな場所で下手に座標移動は使いたくないな。

『次は上に八十五メートル三十九センチ。これで私の元に着く』

よし、次でラストか　！

座標移動して次の空間に着いた途端、液が満たされた巨大なビーカーみたいな容器の中で逆さまで浮いている人間と目が合った。

「やあ。直接合うのは初めてだな。座標移動、結標淡希」

これが、アレイスター。禁書原作のラスボス候補の一人か。

確かに男にも女にも見えて、罪人のようにも聖人のようにも見える気はするけど……さすがに私は子供にも見えるというのは無理があるような気がするよ、原作者さん。

なんかステイルはこの人に相当ビビってたけど、私はそうでもないな。

……私は科学サイドの人間だからかな。ぶっちゃけ、一方通行の方が余程怖い。

「……ここに呼んだ用件は何かしら？」

「君に仕事をやってもらいたい」

仕事、ねえ。大体予想はつくが。

「仕事とは？」

「『案内人』。この場所まで私が呼んだVIPを運ぶ仕事だ」

やっぱりか。

ま、普通にオーケーだわな。

裏側の仕事だが、暗部の構成員と違ってそんなに危険が伴う仕事でも無いし、色々と貴重な情報も手に入りそうだしな。

「それと、君に拒否権は無い。超能力者として学園都市にこれくらいは有益になつてもらわないとな」

「了解。その仕事、受けさせてもらうわ」

「……用件は以上だ。気を付けて帰りたまえ」

さて、晴れて私も案内人になつて裏世界の第一歩を踏み出したわけだが……。正直、暗部入りするかはまだ決めていない。だって学生生活楽しいし。

「お前が新しい『案内人』か？」

窓の無いビルから出て三歩くらい進んだところで、いきなり声をかけられた。

……つて、土御門じゃん！？ 暗部の事を考えている時に現れるとはこれまた絶妙なタイミングだな。

「ええ。ひよっとして統括理事長に用事？」

「いや。新任の案内人の確認と忠告をしにきた」  
「忠告？」

土御門って生で見るとやっぱり良い筋肉カラダしてんなあ。  
さすが先で上条さんを倒す事になる男やでえ。

「何、簡単な事だ。VIPの送迎前、送迎後は気をつけるという事だ。前任の案内人はそれを見落としていて再起不能になったからな」  
「やっぱり狙われたりするの？ 案内人って」

「統括理事長のところへ文字通り案内させる事が出来る人物だからな。仕方無いぜい」

……え？ じゃあ普通に危ない仕事やん案内人。

そこら辺の能力者なら埋めて黙らせるが、一方通行とか垣根が来たらもう泣きながら逃げるしかないんだが。

ああ、嬉々として案内人引き受けた私ってホント浅墓かも。いや、拒否権は無かったけどさ。

「……ほら、噂をすれば。どうやら俺と同じ情報を嗅ぎ付けた連中がいたみたいだな」  
「!?!?」

土御門の言葉に反応するように、建ち並ぶビルの物陰から黒い防護服に身を包んだ人間達がぞろぞろと出てき始めた。

「お前はもう帰ってもいいぜい。俺が潰しておいてやるから」

背中に手を回し、ベルトに挟んでいた拳銃を取り出した土御門がこちらに笑いかけてきた。

サングラスしてるから目だけ笑ってないように見えちゃう。

「私も協力するわ。先で貴方を運ぶ事になるかもしれないし」

「……ふん。威勢の良いねーちゃんだ」

刃向かってくる奴は潰す。

これ、私の基本ポリシーなのよね。

アレイスターさん、何の用ですか？（後書き）

つっちー初登場回。

そしてあわきん案内人任命回。

次回は結構飛びます。

## 長点上機学園が殴り込みに来たぞ

案内人に任命されて五ヶ月くらい経ったが、これまで特に事件は無かったな。

学校の生徒も私に喧嘩売ってくる人は皆無だし、案内人の仕事も何回かやったが、襲撃される事は無かった。

それにしても、もう九月か。大制覇祭だいせいはいさいがある月じゃん。

競技で私の能力って一体どのくらい規制されるんだろうか……競技によるのかな。

「ねえ、結標聞いた？」

机に座って『よく分かるAIM拡散力場』という本の続きを読もうと鞆からそれを取り出そうとした時、隣の席の白木さんが側まで来ていつもより比較的小さな声量で突然、切り出してきた。

「何かあったの？」

「佐川って覚えてる？」

「入学早々私達に喧嘩売ってきた佐川先輩」

「そう、そのダメダメな先輩が他校と問題起こしたんだって」

「どの学校と？」

「よりによって長点上機学園。その女子生徒を病院送りにしちゃったんだって」

佐川エ……。

私にボコられた後も相変わらずあんな態度だったらしいが、他校の生徒にまで手を出すとかどんだけ馬鹿なんだよ。

「それで、佐川先輩は今どうしてるの？」

「停学処分を受けたらしいよ」

停学処分で済んだのかよ。

普通なら退学で警備員のお世話になってもおかしくない事態なんだけどな。

数少ない空間移動系能力者という事で我が校の何かしらの加護を受けてるとしか思えん。

「……実はここからが本題なんだけど」

「うん」

「噂だけど、その事件で激怒した長点上機学園の生徒がうちの学校に報復してやるうと企ててるんらしいんだよね」

報復か。佐川に矛先が向けられるのはともかく、他の無関係な子達に向けられるのなら忍びないな。

「……怖いわね」

「またまたあゝ。結標なら大丈夫でしょ」

「いや、能力開発で霧ヶ丘や常盤台超えてるような学校の連中に囲まれたりなんかしたら、正直勝てる気しないわね」

「はは、は……なんか、あたし怖くなってきた」

「なんてね。大丈夫よ。私が側にいる限りは」

「ヤダ……さすが超能力者格好良い……！」

長点上機の奴等が絡んできたら速効で埋めてやるつもりだが、勝てそうになかったら素直に逃げよう。

勝てない戦はしたくないからな。

「そういえば、ホームルームの時間過ぎてるのに先生来ないね……」

「そういえば、そうね」

「た、大変です!!」

突然、教室の入り口が勢い良く開いた。

何事かとそちらに目を遣ると、神木さんが肩で息をしながらそこに立っていた。

「神木、どうかしたの?」

「長点上機学園の人達が来ていて、その人達が先生や生徒達と校庭で何やらもめているんです……!」

「結標、これってまさか」

「報復ね。まさか霧ヶ丘に直接殴り込みに来るとはね」

うちの生徒に手を出されるのは気に食わないな……。

よし、私が出向くか。

話して通じないようだったら力で黙らせればいいしね。相手によるが。

「ちよつと話つけに行ってくるわ」

「結標! 私も行くよ」

「無茶はしないようにして頂戴ね。あくまで話しに行くだけだから」

「無茶は結標さんですよ。私も行きます……結標さんも白木さんも放っておけませんし」

ん〜。危ないからなるべく来てほしくないんだけどなあ。

まあ、この二人なら放っておいても来そうだし……とりあえず、急ぐか!

現場に到着すると、こちらの学校の生徒と教師合わせて三十人くらいと長点上機の生徒十人が一線を引いた距離で睨み合っているのが確認出来た。

「っておいおい……霧ヶ峰の馬鹿もいるじゃないかよ。」

「どう考えてもおかしいだろうがよ。他人に全治三ヶ月負わせた糞ヤローの処罰が停学で済むなんてよお。たまらねーな」

「それはこちら側の判断だ。君等、他校の生徒が口を挟める事ではないだろう」

「ああ!？」

何かこっちの教師と霧ヶ峰の隣にいる長身のイケメン君が口論している。

さて、どのタイミングで飛び出そうかな。

「どうしても佐川とかいうヤローの住所を吐く気はねえんだな？」

「無論だ」

「じゃあ、こうしてやる。テメェんとこの一番強い生徒を一人出しな。ソイツが俺に勝ったら大人しく退いてやるよ。確かこの学校は超能力者が一人いたよなア？」

「おいふざけんなよ須佐！ 結標は俺のライバルだぞ!! 勝手に手を出すんじゃない！」

え？ 何勝手にライバル宣言してくれちゃってんの霧ヶ峰君。

「黙つとけよ。俺の座標交換テソルフォースに一度たりとも勝った事ねえ雑魚はよ

お

「何だと!？」

おーおー。そのまま喧嘩でもして共倒れしちゃってください。

「というかテンソルフォース？ 聞いた事無いな。名前の通りテンソル力場か何かを操る能力か？」

「はいはい。どいたどいた」

ライトブラウンの髪の毛を後ろに束ねたこっちの女子生徒が前に進み出た。

須佐とかいう奴に全く恐れる様子も無く、長点上機の生徒達をジロリと睨みつける。

「アナタ等如き、うちの超能力者が出向くまでもないから」

「あん？ テメエなんかには無えんだよ」

「話す気は無いから『喋って』て」

「テムエ……誰にむごっ！？」

驚いたように自分の喉に手を当てる須佐だったが、ヒュー、ヒューという空気の漏れる音しか出てこない。

ほお……何やったのかは知らないが凄いな。

「はいはい、長点上機学園のみなさん。この学校から『出ないで』ね」

「なっ！？ 体が」

霧ヶ峰が声を上げながら、後ろへと退いていく。他の長点上機の生徒も同様の行動をしていた。

何だこれ、言った事と逆の行動を強制させる能力か？ 恐ろしいな。

おや、まだ一人微動だにしてない奴がいるようだな……。

**長点上機学園が殴り込みに来たぞ（後書き）**

色々な能力者出してごめんなさいw

次話でライトブラウンの子の名前とある程度の能力説明があります  
w

## 不気味な奴だ

「これが篠崎さんの能力……実際に使用するところは初めて見ましたね……」

「篠崎……学校の成績でトップ十入り常連の篠崎さん？」

「はい。いつもはお仕事をしてるとかで学校にはあまり来ない方なんです」

学校サボってまでする仕事……裏関係っぽいな。私がやっている案内人はそんな必要は無いが。

「どんな能力なの？」

マリストリガー

「犯罪誘発といって元々は周りの人間の悪意を感知したり、その悪意を操作する精神干渉系統の能力だったらしいんですけど……それを応用させて、『使用者の命令に従えなく』しているらしいです」

「へえ」

「何それ怖ッ！」

ひねくれているけど、強力な能力だな。

という事は一人だけ残っているあの男は……。

「アナタ……悪意も敵意も無いの？」

「ふふ、僕を動かしている原動力的な物は純粹な興味だからね」

「……そこに『立ってて』」

「ま、この学校の生徒で興味的な物があるのはただ一人だけ」

うわ、全然微動だにしない。

悪意や敵意が無いといえは人間を雑草を薙るみたいな感覚で殺せる木原くんを思い浮かべてしまうが、コイツの場合は……興味が悪

意に勝っているのか。

「はあ……ちなみにアナタが興味があるその生徒って誰？ 大体予想はついてるけど」

「ん？ 結標淡希だよ」

はい、指名入りましたー。まあ元々出る予定だったけど。

「バトンタッチね。座標移動さん」

「お疲れ様。篠崎さん」

こちらに戻ってきた篠崎さんの手にタッチして、私は前に進み出した。

「やあ。結標淡希。会いたかったよ」

癖毛の無い短い黒髪に、制服のボタンは全て締めているという真面目な印象を持たせる風貌をしたその男はニコニコとした笑みを結標に向ける。

「一応聞いておくけど、帰れと言われて帰る気はないの？」

「帰れ的な事言われても帰る気は無いね。僕、君と手合わせしたくてここに来たんだからね」

結標はスカートのベルトに挟んであった懐中電灯を抜き取りながら薄く笑う。

現在の彼女の能力の精度なら懐中電灯で対象を指定する必要はほぼ無いのだが、あるかないかで言うところがあった方がいいらしい。

「なら、速効で終わらせてあげるわ」

懐中電灯が振るわれ、座標移動によって少年は胸の高さの位置まで体を地面に埋められてしまった。

しかし、少年はニコニコとした笑顔を絶やさない。

「そういえば挨拶的な事をしていなかったね。僕の名前はおおまたりようき大叉竜鬼。宜しく」

妙なタイミングの自己紹介に結標は眉を潜める。

突如、大叉の周りの地面が無音で削り取られた。

「よつと」

先程出来た直径五メートル程のクレーターから大叉は跳躍して平らな地面に降り立つ。

「凄いな。本当に物体に触れずに対象を転移させる事が出来るんだ」  
「随分と余裕みたいだけど、まさか私の手の内がこれだけだと思っているの？ ツ！」

直ぐ様、結標は自身を転移させる。

大叉が弾丸のような勢いで此方に突っ込んできたからだ。

「あれっ。これ、僕の全力的なスピードだったんだけど。これでも捕まえられないか。さっすが超能力者、演算速度も凄いなだね」

（身体強化系の能力か？ けれど、さっき地面を削り取ったのは…  
…？）

相手の能力の分析を始めようとした結標だが、思わず頭を傾げそうになる。

(何にせよ、もう少し様子を見る必要があるな)

現在、結標と大叉の距離は五メートル程。

大叉ならこの程度の距離は一瞬で詰めてくるだろう。

だから、結標は自身を転移させる演算式に集中力を割く。

埋めて駄目ならコルク抜きを体内にぶち込むのが普通の常套手段なのだが、それをすれば相手に確実に怪我をさせてしまう。

それでは佐川の二の舞になってしまいかもしれない。

(ん？ 佐川……？ そうだ、いい事思い付いた。だが、未知の能力を持つてる相手に素直に近付きたくはないな……)

「さあ、いつまで逃げてられるかな！」

高速で迫る大叉に対して、結標は再び自身を転移させて攻撃を回避する。

標的を見失った大叉の攻撃が一瞬、止まる。

(ここだっ！)

座標移動を使い、結標は大叉を上空一メートル程の位置に移動させる。

「なっ……！ 懐中電灯？」

目の前に転移されて出現した懐中電灯。

その意図を理解する暇も無く、大叉は背中に衝撃を受けて地面に

叩き付けられる。

更に衣服をコルク抜きによって地面に縫いとめられた。

(なんとか上手くいったわね)

結標のとつた方法は簡単。

佐川と戦った時のように上空にいる相手のがら空きの背中に打撃を与えて地面に叩き落とす……佐川の場合は佐川自らが自身を上空に転移させたが。

佐川との時の違いは、『結標が』相手を上空に転移させた事と、懐中電灯を気を引き付けさせるために、相手の目の前に転移させてブラフをかけたところか。

「まだ続ける？ それとも大人しく帰る？ まだ続けるといふのなら次は上空千メートルの空の旅をプレゼントしてあげるけど」

「うん。今日はこれくらいでやめておくよ。あくまで『手合わせ』的な事なんだしね」

大叉の衣服を縫い止めていたコルク抜きが音も無く消える。

しかし、これは結標がコルク抜きを転移させたのではない、先程起こった地面が削り取られる現象みたいにコルク抜きが消し去られたのだ。

「またね。今回はこれで満足したよ」

立ち上がって、結標にニコリと笑いかける。

そして踵を返して大叉は悠々と校門へと歩いていく。

「あ、僕の仲間達にはもう霧ヶ丘の生徒には手を出さないようにって注意しておくよ。こう見えて僕、長点上機を仕切ってる的な立場

なんだよね」

校門を通って学校外へ出た大叉を見届けてから結標はようやく肩の力を抜く。

他の長点上機のメンバーも篠崎の能力によって学校外に追いやられていた。見たいだった。

「……不気味な奴」

思わず、結標はそう呟いた。

## 不気味な奴だ（後書き）

能力不明な上に何がしたいのか分からないキャラ出しました。  
まあ彼はその後も出ます。

次話で高校一年編が終わり、超電磁砲編に入ります。

というか次話はほぼ超電磁砲ですねw

そろそろクリスマスだな

もう季節は十二月の中旬に入った。  
肌寒いどころか普通に寒い時期だ。

そんな時期に私こと結標淡希は、上は胸に巻いたサラシにブレザーのみ、下はミニスカートという格好をしていた。

「FOO！ 似合ってるじゃないか！」

「いや……何これ」

神山が歓声を上げている中、私は鏡に映る自分の姿に呆然としていた。

「いやさあ……これ原作の結標の本来の格好だけどさあ……生で見ると凄いわ……」。

大事な話があると聞いて研究所に呼び出された結果がこれだよ！！

「この格好をさせたいがためにわざわざ私を呼んだの？」

「チツチツチ……甘いな淡希よ。この格好にはちゃんと意味があるんだぞ私の趣味入ってるけどな」

「今サラッと趣味が入ってるって言ったわよね！？」

「これを見る」

神山が自信に満ちた顔で細かいデータが書かれた三枚のプリントを渡してくる。

「その格好をすると、普通に制服を来ている時に比べて能力の精度が上がるといって推測データが出ているんだ」

「あくまで『推測データ』じゃない」

「だあーっ！！ お前そこは乗れよ！ ノリノリになれよ！ だから毎年『あたし今年のクリスマスも一人なのお〜彼氏欲しいよおお！ ふえええん！』って私に泣きつくはめになるんだよ。今年も寂しい聖夜を過ごしたいのか？」

「勝手に話作ってんじやないわよ！！ あと、クリスマスはいつも友達と過ごしてるから寂しくなんかないから！」

「テメーの話は聞いてねえ！！ そのプロポーションを活かせ！！ 男を振り向かせろ！」

「……もはや全然違う話に摩り替わってる事に貴方気付いてる？」

神山が暴君すぎる。

というか原作の結標が何故あんな格好しているか真面目に分からん。

前までは単に露出狂だと思ってたんだけど、原作絵師のはいむら先生が書いてた結標の私服イラストはほとんど露出が無いんだよな。つまり……どういふ事だつてばよ？

まさか、本当にこのサラシミニスカスタイルは能力行使に影響があるのだろうか。

「あれ？ で、何の話してたんだっけ。下はふんどしにしようって話だったかな？」

「趣味全開になってるわよ貴方……」

「神山さん。来週導入する機材の……ふおお！？」

部屋に入ってきた光山が私を見るなり、凄い勢いで後ずさった。

あーあー、ドン引きされるとやはりシヨック、

「む、結標君！ 君は冬になると解放的になってしまっタイプだったのか！？ けしからん、実にけしからんぞお！！ と」

なんかデジカメ取りだそうとしてやがったからとりあえず全裸にして外に飛ばしてやった。

……とりあえず普通の制服に着替えよう。

暴走しかけた神山をなんとか抑えきった私は現在、第七学区を歩いている。

能力使わずにわざわざ歩いているのは少しでも運動量を増やそうという最近の私の試みである。

第十八学区から第七学区までは座標移動使ったけどね。

「さて、何しようかしら。まずは行きつけのデパート行って、それから……」

「お願いします……っ！ 誰か！ 強盗が！」

聞こえて来た幼い女の子の声に足を止める。

見ると、シャッターが降りた郵便局の前で背丈の低い黒髪の女の子が助けを求めている様子だった。

状況を更に詳しく確認するために、私は座標移動を使って郵便局に集まった野次馬達の後ろに移動する。

助けを求めている女の子は初春だった。まだ頭の花飾りは一つしかないが、紛れもなくこの女の子は初春ついはる飾利かざりだ。

更にシャッターは何らかの力で食い破られたかのように壊されている。

「誰、かぁ……っ！」

破れたシャツターから見える郵便局の中の状況を確認して、初春が何故こんなにも必死に助けを求めていたのかを理解した。

「あなたと組むだなんてゼーッタイにお断りですの……!!」

初春と同じくらい女の子が頼り無い立ち方で茶色のコートを着た男と対峙していた。

茶髪のツインテにこの口調……確実に白井黒子ちゃんですね……。この状況、臆気ながらアニメで見た記憶がある。

私の記憶が正しければこの茶色のコート着ている男の能力は……。

「そうか。それならここでサヨナラだ」

男がポケットから取り出した複数の鉄球を黒子に向かって投げ付ける。

思い出した、確かコイツの能力は絶対等速イコールスピードとかいう能力。

その能力である投げられた鉄球は、能力を解除するか投げた物が壊れるまで、同じ速度で進み続ける性質が付加される。

つまり、このままだと黒子は……!!

「鉄球は一つしか投げられないとでも思ったかあ!!」

「……!!」

悪いな、絶対等速。

私、小さな子供とかを平気で殺そうとする輩を冷静に見過ごせる程強くないんだよね。

ま、かなり痛いだろうけど恨むなら自分を恨めよ !

「ぐっ!?!? んぎゃあああッ!?!」

投げた鉄球を私によって肩に転移させられた絶対等速が絶叫する。その隙に飛び掛かって絶対等速を地面に押し倒した黒子を確認した後、私は野次馬の群れから離れた。

「待って」

へ？ どこかで聞いた事あるような声だな。

「今、あの子を助けたのって……あなたでしょ？」

み、御坂美琴みさかッ!?

そういや、本来なら黒子助けるのって美琴だったっけ!? あ、あちゃー。ひよっとしていらん事をしたか私。

「その顔……凶星でしょ」

はあ、隠してもしょうがないか。

「何となく見過ごせなかっただけよ……」

「やっぱり」

「今さっきの、座標移動っていうんだっけ。霧ヶ丘の超能力者だよね?」

私が霧ヶ丘の制服を着ているとはいえ、さっきの現象だけで当たりをつけてくるとはさすが超能力者といったところか。

「あの子を助けてくれて、ありがとう。あ！ 私、御坂美琴。えーと、とりあえず宜しくね」

「結標淡希よ。宜しく」

なんか想像してたのと違うシチュエーションで美琴と遭遇してしまっただ……。。

そろそろクリスマスだな（後書き）

これで本編への準備は整った。

プロローグ、終わるぞ。

b y 垣根帝督

## 【おまけ2】

ここまで出てきた能力をざっと

【空間移動】テレポート……駄目な先輩の佐川の能力。

最大重量は五百キロ。

最大飛距離は三百メートル。

強度は4。

【座標交換】テンソルフォーカス……須佐の能力。

詳細は先になります。

強度は4。

【犯罪誘発】マリストリガー……篠崎の能力。

周りの人間の悪意や敵意を感知する精神干渉系統の能力。

更に、相手の悪意や敵意を自分に対してひねくれた方向に増幅させる事により、『使用者の命令に従えなく』する事が出来る。

【?????】……大叉の能力。

現在の長点上機のトップの能力。

## 【主人公の現在スペック2】

【名前と年齢】……結標淡希（16）

### 【現状】

一方通行と知り合い（ただし二回会話した程度）

土御門と一回だけ共闘

上条当麻とは結構会ってたりする

御坂美琴と初遭遇

案内人をやってる事に抵抗はない。

とりあえずは今の学校生活を維持したいと考えている。

### 【能力】

能力の応用度や精度はずっと上がり続けている。

最大重量……20トンちよい

最大飛距離……2800メートルくらい

液体、固体以外にも気体もある程度転移させる事が出来るようになった（例：空気を抜き取って真空を作るなど）

相手が空間移動系の能力者の場合、演算式を読み取って相手の行動を先読み出来るようになった。

座標を指定する精度が上がり、懐中電灯の必要性が薄くなった。

朝はサイン……昼は宿題の手伝い……

七月十六日

\*

『飛距離五千八百七十メートル。指定位置との誤差……0ミリ。総合評価、超能力者（レベル5）』

今回はこんなもんか。

調子良い時は六千メートル軽く超えるんだけどなあ。

「す、凄いです結標さん！　ウチ、憧れちゃいます！」

見ると、私より少し背丈の高い女の子が何やらキラキラとした瞳ををこっちに向けていた。

体操服の色からすると、一年生だな。

「あ、すみません！　突然……ええつとですね……あの」

「気にしてないわ。それで、御用件は？」

「その……うう……」

女の子は後ろに手を回したままモジモジと身動きしている。

まさか、凶器とか出して来るんじゃないだろうな。

……いや、無い無い。案内人やりだしてからどうも人間不信になりつつあるなあ、私。

「あの、体調でも悪いのかしら？」

「こ、これっ！」

「へ？」

女の子がバツ！ と勢い良く出して来たのは色紙とマジックペンだった。

「ウチ、同じ空間移動系能力者として結標さんに憧れているんです！ 良かったらサインお願いします！！」

これって、私のファンって事なのか？

そういえば前の身体検査の時も一年の子から握手とか求められたりしたな。

んんー。サインなんか書類以外、書いた事無いんだけどな。

「やっぱり迷惑……でしたかね」

「ちよつと待ちなさい」

色紙とペンを能力を使って手元に移動させる。

後輩のサインくれているささやかな願いを蹴るわけにはいかな。

まず『結標淡希』と色紙の真ん中辺りに書いてみる。

これだけでは何か味気無い感じがしたので小さく懐中電灯の絵も付け加えておいた。

よ、よーし。出来たぞ……！

「やったやった！ 本当にありがとございますー！」

ふードキドキした。

喜んでくれて何よりだ。

「相川さんズルいよー」

「結標先輩！ 私もサインもらっていいですか!？」

「あたし色紙持ってないから体操服にサインしてください!」

え、ちょ。何かわらわらと一年の生徒が集まってきたんですけど!??

結局三十人分くらいのサインを書くはめになってしまったよ……。能力使うより、よっぽどこっちのが疲れる。

「ファミレスにでも行ってみようかしら」

午前中に身体検査は終わり午後は暇だったので、第七学区をぶらついている。

というか暇な時は八割第七学区に行っている。学園都市の中心地みたいな場所だしね。

本来ならば白木さんと神木さんも誘いたかったところだったが、篠崎さん主催のサークル活動に参加するという事でそれは叶わなかった。

携帯の地図アプリで適当に見付けた最寄りのファミレスに入る。クーラーの利いた店内は外が如何に暑いかを思い知らせてくれるな。

だからといってあのサラシミニスカを着る気は未だに無いが。

「……あら」

座る席を探していると、四人用の席に座って問題集とノートを広

げている知り合いがいた。

「こんにちは。上条君」

「ん？ ああ、結標さん！」

「いやー。気分転換に外で宿題やってみるもんだな。上条さんに珍しく思わぬラッキーが転がりこんで来るとは」

「良かったわねえ」

私は他人事のように呟きながら、さつきウエイトレスが運んできた桃のアイステイーをストローで吸う。

ちよつと甘めだなこれ。

「こんな鬼畜問題共をあつという間に解いてしまっなんてな。さすが超能力者の頭脳っていうか」

「超能力者関係無いと思う」

「え？」

「私は高校二年だからそれ解けて当たり前だし、高校一年の上条君も普通に解けると思うのだけれど。授業をきちんと聞いていればね」  
「グサーッ！ 上条さんのガラスのハートに鉛玉がつっ！」

左胸を押さえて後ろに仰け反る上条さん。

君のハートはガラスどころか核シェルターに多重防御結界貼ってあるくらい頑丈だと思うんだけどな。

「にゃーにゃー。随分と楽しそうだなカミヤん？」

「おう？ 土御門か」

土御門……いつ見てもアロハ服とグラスサンが似合ってるな。

「土御門、貴方も涼みに来たのかしら？」

「ま、そんなとこだにゃー」

「ん？ お前、結標さんと知り合いなのか？」

「ふっ、知り合いも何も俺達……」

と、ニヤリと口端を吊り上げる土御門。

次の瞬間。

彼は何を思ったか私の横に腰掛け、首に腕を回して私を抱き寄せ  
てきた。

「こつという関係なんだぜい」

「な、何い！？」

あまりにの早業に声も出なかった。

何とか我を取り戻した私は土御門を睨み付ける。

しかし土御門はニヤニヤとしたまま何やら耳打ちしてきた。

「（話合わせるか、そのまま大人しくしてろ）」

……ああ、把握。

さすが嘘つきの土御門君やでえ。エグい事すんなあ。

「結標さんマジなのか！？」

「ええ……実はそうなのよ」

ま、私も大概な性格してるけどな！！

「つ、土御門……お前、ロリコンだったんじゃないかねえのか……！！」

「それはカミちゃんの勝手な思い込みだにやー」

「俺はお前の事信じてたんだぞ！ 同じモテないメンズだと……！」  
「はい。ピロリン」

上条さんが目尻に涙浮かべたところで、土御門が素早く携帯を取りだし、そのカメラ機能で上条さんの半泣き顔を撮影した。

「嘘に決まってるだろ。カミちゃんは実に馬鹿だにやー」  
「は？」

「さて、クラスメイトのみんなにこの写真をばらまくか」

「て、テメエ土御門オオオオツ！！ 高校生のいたいけな心を弄びやがってエエエツ！！」

「あ、もう青髪に送ってしまったにやー」

「ふざけんなテメエマジで！ 消せ！ 今すぐ消しやがれ！！」

「はい、真っ赤になったカミちゃんの顔ピロリン」

やべえ……上条さんの涙目写真超欲しい……。

仲良いねえこの人達。

おや、着信だ。誰からだろう……御坂さんか。

『あ、結標さん』

『こんにちは。御坂さん。どうかしたの？』

『今、暇？』

「隣は騒がしいけど、暇ね」

学園都市のハイテク携帯だから上条さん達の声は向こうに届いてないだろうけどね。

『騒がしい……？ じゃあ、今から遊ばない？ 今』第七学区ふれ

あい広場』って場所にいるんだけど』

「構わないわよ」

『分かった。黒子も結標さんに会いたがってたわよ』

「あはは……」

『じゃあねー。待ってるから』

白井さんか……。まさかあんな関係になるとは。

さて出るか。

あ、その前に会計済ませないと。

……上条さんの分も一緒に払うか。からかってしまったお詫びに。

朝はサイン……昼は宿題の手伝い……（後書き）

原作で上条さんと土御門の友情話をもっと見てみたいと思ったり

白井さん、そういうのやめようぜ

『第七学区ふれあい広場』に着くと御坂さん達はベンチに座ってクレープを食べている所だった。なんて声掛けようか。えーと。

「……おいしそうね」  
「むぐっ！ 結標さん」

一瞬、喉にクレープを詰まらせた様子の御坂さんだったが、すぐに立て直してこちらに爽やか笑顔を向けてきた。色々な意味で流石だ、御坂さん。

「お師匠様あ！ お久しぶりですのーっ！！」

突如。凄まじい邪気を放つ空間移動の演算式を感知したので、私は横へ飛び退いた。  
私が居た位置のかなり近くに茶髪ツインテの女の子が出現して落下し、地面にキスをする形になった。

「白井さん……いつも言ってるけど、そういうのやめて欲しいのだけれど」

恐らく私に抱き付くか、その他変態的な行動をしようとしたこの子は白井黒子。

本来なら先で対立して殺し合いをする関係になる人物なのだが……どうしてこうなった。

明らかに禁書の正史狂ってるよねこれ。  
まあ、本来の結標と違って私は『残骸』レムナント なんざ興味無いし、別に

御坂さんや白井さん達と争いたくもないし、一方通行に男女平等顔  
面粉砕ベクトルパンチ食らうのもごめんだし、これはこれでいいや。

「お姉様もお師匠様も黒子のスキンシップには手厳しいですの」

そりゃ人目のつくところでダーク 抱き付きなんかされたら誰だつ  
て拒否するよ。

「御坂さんの……知り合いですか？」

ひよっこりと黒髪ロングの女の子が御坂さんの横から顔を出した。  
おお、佐天<sup>さてん</sup>涙子<sup>なみこ</sup> さんじゃないか。

佐天さんって白木さんに顔似てるなあ。白木さんはポニーテール  
だが。

「うん。この人は」

「ご紹介しますの!!」

「うわっ!!」

地面に伏せていた白井さんが勢いよく突然立ち上がる。

「この方は霧ヶ丘女学院所属の超能力者、結標淡希さん。因みにわ  
たくしの師匠でもあるんですのよ」

「師匠って程でも無いと思うのだけれどね」

「いえ、師匠ですの!!」

「……………」

本当にちよつと十一次元座標演算のレクチャーをしただけで、師  
匠とまで呼ばれる言われは無いと思うんだけどな。

「本日の身体検査もお師匠様のお蔭でバッチリでしたわ。飛ばせる重力も飛距離も前より上がってたんですの」

「それは私のお蔭じゃなくて、白井さんの実力だと思っわよ？」

「そ、そんな照れますの……」

そう言つと、顔を赤らめてもじもじとし始める白井さん。

はあ……今度そういう態度は男に対して取れって本気でレクチャ―してやるうかな。白井さんのスペックなら世の中の男の大多数は落とせるだろうし。

「霧ヶ丘女学院って……確か結構凄い名門校でしたよね？」

「そう！ 能力開発で常盤台中学と肩を並べる名門お嬢様校ですよ！」

「あの一初春？ あたしは結標さんに質問したんだけどなあ？」

初春さんは安定してお嬢様関連の食い付きが凄いな。

しっかしこの世界のお嬢様って怖い人多いよな麦野とか麦野さんとか麦野様とか。

「しかも超能力者ですよ！？ まさか御坂さんだけでは無くて、結標さんにも会えるなんて……！」

「……ところで。何であの銀行、昼間からシャッター降りてるんですかね？」

銀行？

目を遣ると、なるほど確かに昼間なのにシャッターが降りてる。

そして次の瞬間、シャッターが爆発して弾け飛び、その中から三人の男達が出てきた。

あー、この展開か。

「初春。警備員に通報を」  
「はい！」

おお。風紀委員モードに入った白井さんと初春さんカッコいいな。

「黒子！」

「お姉様。ここは風紀委員の出番ですの。お姉様はベンチに座ってゆっくりとクレープでも食べながら見ててくださいまし」

「全くもう……油断しないようにね」

「分かってますの！」

空間移動をして目の前に現れた白井さんを見て犯人達の動きが止まる。

「そこまですの」

「て、空間移動系能力者！？ しかも風紀委員かよちくしょう！！」

三人の男の内、ナルトのヒルコにそっくりな顔の男が白井さんに掴みかかろうとするが、純粋な体術のみであっさりと投げ飛ばされてしまう。

「あなたごとき、能力を使うまでもありませんの」

「テメエ……ナメやがって。炭になってもらうぜ！！」

残った二人の内、逆立つ黒髪の男が掌の上に炎を出現させる。

確か幻想御手使って強能力者（レベル3）の発火能力者だっけ。  
レベルアップ

「逃がすかよ！」

歩道から道路へと走って飛び出した白井さんに向かって発火能力

者は炎を投げ付ける。

「誰が」

空間移動をした白井さんが発火能力者の頭上に現れる。

「逃げましたって？」

そして発火能力者の頭を蹴り飛ばして地面に叩き付けた。

「くそお！」

残る茶髪の男がダツシユで逃げ出そうとしていたが、ソイツは私が地面に埋めておいた。

白井さん発火能力者を拘束するのに目がいつて気付いて無かった様子だし。

「結標さん。小さい男の子見なかった？」

「見てないけど、どうかしたのかしら？」

「見学ツアーに来てた子達の一人がさっきから見当たらないらしいのよ」

あー。そういうイベントも起こってたんだ。

白井さんの戦いに夢中になって気付かなかったよ。

「それは大変ね。じゃあ私は外を探すから御坂さんは公園の中をお願いしてもいいかしら」

「分かった。多分、外には佐天さんもいると思うから宜しくね」

「ええ、分かつ

」

ん？ 何か妙な音がしないか？

ちょっと待て。

何だあの小型ロケット砲は！？ こっちに向かってきてないか！？

「くっ！」

咄嗟に御坂さんが電撃を飛ばす。

ロケット砲は空中で爆散して此方に被害は無かった。

「御坂さん！ どうかしたんですか？ さっき大きな物音が……！」

「初春さん。怪我は無い？」

「はい。大丈夫です。ところで……！」

「ああ、さっきね」

何だ、これは。

銀行強盗の三人はもう動けない状態だ。

と、なると。

ア（・イ）（・ツ）（・等）の仕業か……？

白井さん、そういつのやめようや（後書き）

黒子（結標に対して）キャラ崩壊

美琴達と対面しましたがどっこい結標さんには結標さんの問題があるようですw

てか、年末忙しすぎて死ねますなwwwwww

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4531y/>

---

とあるもしもの座標移動《ムーブポイント》

2011年12月29日15時49分発行